
何様、俺様、聖霊様

鷲見 みずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何様、俺様、聖霊様

【Nコード】

N20460

【作者名】

鷲見 みずく

【あらすじ】

妹を守って車に轢かれた　と思ったら、異世界トリップしていたようです。だがしかし異世界の王子様と恋愛などという流れはすぐに断ち切られた。なぜなら私は実体のない聖霊様になっていたのだから。

現在王宮動乱（傍観）編。

その1・私、聖霊になるのこと（前書き）

初めまして、驚見みずくと申します。『何様、俺様、聖霊様』を楽しんでいただければ幸いです。

注意としては、だんだんと残酷な表現を入れていく可能性が高く、あまりそういったものを好まない方には不快に感じられる可能性があります。不快であると思われる方はここで引き返してください。

その1・私、聖霊になるのこと

気が付けば宝石の前に立っていた。いや、前じゃないな、上だ。

宝石は大きさにして高さ十三メートル、幅五メートル、奥行き七メートルはあり、青と緑が共存した素晴らしいものだった。削りだしたらともかくとして、この大きさだったら軽く国家予算はあるんじゃないのかな。その上に浮かんでいたんだから、私は一体どうしたって言うんだろう？

私に何が起きたと言うのか、何故こんな場所にいるのか　分らない。だから少し記憶を辿ってみよう……。

初任給の手取りは十七万だった。税金とか天引きとかで抜かれたけど、初めてのお給料となると感慨深いものがあり凄く尊いものにした。のだけれど。

「ねえねえお姉ちゃん、お給料出たんでしょ？　服買ってよ！」

「えーっ!？」

「今お姉ちゃんお金持ちでしょ？　ゲームしてばっかししないでさ、買い物行こうよー、服買ってよー」

ちようど給料日の翌日が土曜日だったからか、腰にすがり付いて妹が服だの靴だのとねだってくるのを引き剥がし、ベッドの上に放り投げる。ええい、今翼人を撃破しておるのだ邪魔をするな！

「わーん、無体な！　あーれーお代官様ー!!」

「誰がお代官様じゃ！　あんたには色々と奢ってくれる彼氏がいるでしょうが、この金は貯金に回すの！　あんたには一銭も使いません」

「よっ君は別なの！　私はお姉ちゃんと買い物に行きたいのよー!!」

私の妹は美人だ。同じ両親から生まれていることは分るくらい私たちは似ているが、妹は両親の良いパーツの組み合わせで生まれたけど私は凡庸な組み合わせになった。横に並べば姉妹と分るのにこ

の差は歴然としていて、友人からは良く慰められたものだ。あんたはボーイッシュ路線で行け、と。どこが慰めなのか分らなかった。

そしてそんな可愛い妹には蝶花 と言えば聞こえは良いが、蝶やら蛾やらが群がって来る。で、妹は中でも両親も認める好青年である洋介君とお付き合いをしているのだ。実家が裕福なご家庭で、本人も少しおっとりしているがしつかりした青年でとても好ましい。美人は見るとか言いつけど私の妹に限ってそれはなかったよ。うだ。良かったね我が妹よ。そのままゴールインしてくれても私たちは構わないって思っているよ。

「私と、ねえ」

「うんうん！ お姉ちゃん最近ネットゲばかりでしょ！？ 可愛い妹と遊ぼうとは思わない！？」

そういえばこの妹は、こんな平凡な私を好いてくれるなかなか奇特な性格の主だった。高校時代ネットゲにハマってヒッキーと化していた私に良く愛情表現ができるものだ。もちろん今でもネットゲは大好きだが昔ほどじゃあない。

「しゃーね、行くか」

「わーい！ お姉ちゃん大好き！」

「それは洋介君に言っておけな。洋介君泣いて喜ぶよ」

抱き着いてくる妹をいなしパソコンをスリープにし、私は室内着から外出着へ着替える。流石にスパッツにＴシャツで外には出られない。

「お姉ちゃんお金持った？」

「私にたかるな」

一応三万くらい持っていれば映画見たり何か買ったりするには足りるだろう。千円札が二枚入った財布に諭吉さんを三人追加し、実用一辺倒の鞆に財布を突っ込んで部屋を出る。妹は服の用意をしていたのか意外に早く用意を終えていて、白いワンピースにふわふわの上着を着ていた。上着の名前なんか分らない。カーディガン？ キヤミソール？ キヤミソールって何だったっけ？

少しサイズが大きいめのシャツにジーパン姿の私に対し、妹はなんと可愛らしいことか。友人をして谷女（胸がえぐれている）と言わしめた私、きよぬー族ではないものの上着の上からでも分る胸の持ち主である妹。街へ出ると街頭アンケートのねーちゃんに『そのお兄さん』と呼びとめられる私、軟派男が次から次へと絶えない妹。ちよつと情けない気もするが逆ハーレムを作りたいなんて願望がないから別に羨ましくはない。

腕に絡みついてくる妹と電車で街へ出る。三十分もせず着いたそこは県内でも開発された都市で、『街に出る』とはここへ来ることを言う。ちよつと値が張るが美味しい店とか某屋根裏部屋^{ロフト}とか、色々と回って遊んだ。妹のことは嫌いではない。それどころか好きだ。

友人と一緒に遊ぶのとは違う気安さにいつの間にか私も遊びに熱中し、気が付けばもう夕方の五時半を回っていた。我が家の夕食は七時前、そろそろ帰るべきだろうということで妹に連絡を任せる。信号を渡ればすぐ目の前は駅だ、帰り道はテンションが下がるから気をつけないとな、と疲れた頭で考える。妹が母さんと談笑しているのを横耳で聞きながら車道の信号が赤になるのをぼんやりと待っていた、その時。

暴走した車が、十字路を直角に曲がって現れた。電話に夢中の妹はチラリとそれを見ただけですぐに会話に意識が戻る。駄目だ、話に夢中になっっている場合じゃない……！ 妹は少ししか見ていないため分らなかったようだが、車はそのまま私たちのいる歩道へ突っ込んでこようとしていたのだ！

どうする、どうする！！ 妹は顔を蒼褪めさせ、助けを求めるように私を見つめた。妹の大きな瞳がこれでもかを見開かれている。私に恋人はいない。友達にはいるにはいるが、私の死をいつまでも引きずるタイプじゃないだろう。だが、妹には洋介君がいる。私は笑った。妹を突き飛ばし、ついでにその場にいたおばちゃんたち

やい子の二人連れも突き飛ばした。そして

「いやああああお姉ちゃん!!」

妹の悲鳴を聞きながら、意識を飛ばしたのだ……。

さて、それでは今の状況を良く考えてみよう。私 半分透けて

いる。そしてなんと今はや浮いている。周り 鬱蒼と茂る森。こ

れはもしや、異世界トリップと言うのではなかっただろうか。妹よ、
君のお姉ちゃんはどうやら異世界にきてしまったようです。

「とか、ないないナイン」

ありえない。霊体でトリップとか、それも人気のない森の中とか
寂しすぎる。本当にもう……美形の王子に拾われて逆ハーレム!

とかじゃなくて良いからさ、人間と触れ合える方が良かったよ。て
いうかハーレムは妹で見慣れているから是非とも遠慮したい。あれ
は男たちの目が怖かったのなんの、『男だろうが女だろうがコイツ
に近付くんじゃねエ!』と言わんばかりの目で睨んできたくせに、
私があの子の姉だと分るとすり寄って来たあの汚さよ。でも異性に
対する幻想が早々に打ち砕かれたおかげで悪い男に引っ掛かること
もなく、男に引っかからない代わりに女が引っかったことが頻繁
にあるけれども、二十数年を気楽に過ごせてこられたわけだから良

かったというべきなんだろう。うん。

「はあ……」

ため息を一つ吐いて体勢を変え、足元の巨大な宝石　　というよりは宝岩に腰かける。これは石じゃありません、岩です。

重さのあまり地面に深々と刺さっているようで、きつとこれは全長十五メートルを越えているに違いない。ここがどんなところなのかは分らないけれど、きつとそのうちここにも人間がやって来て私を切り売りして行くに違いない　　って、あれ？

「何で『私』とか考えちゃってんの？」

この岩が私なはずがないじゃないか。私はただの霊体であって石なんかじゃない。撫でるように岩の表面をくると触ればなんだか温かいものが伝わってきた。岩が発熱しているわけでは……ないよね。心まで温かくしてくれそうなその波動は掌から伝わり腕を駆け上り、心臓まで届いてから全身に波紋状に広がった。知識、いや、この宝岩の記録が伝わって来る。大地が生まれると同時にこの地に注がれた『神の恵み^{マナ}』が数万年の年月をかけて成長したものが、この宝岩。そして長い年月を経て得たのが　　私と言う自我。……あれ？　　おかしくない？

普通、自然発生的に自我が宿るものだと思っていたんだけど違うのだろうか。私が特殊なのかそれとも精霊とはそんなものなのか。これじゃあ全国の異世界トリッパーさんたちは皆聖霊になるのか？

それはないか。きつと恋愛や冒険に心躍らせていらっしやるに違いない。私と違って。

それにしても、これでは異世界には来られはしたけど恋愛方面に行けないな。誰が好きこのんで半透明で後ろが透けている女と恋をしたいもんか。責任者連れてこい責任者。そりゃあ男に対して夢なんてさっぱり抱いてないけどさ、恋の一つや二つしてみたいと思う乙女心が分らんのか。これは酷すぎる。

「はあああああ……」

私は膝を抱えて長々と嘆息した。周囲に人の気配はない。孤独死

という言葉が浮かんだが、精霊に死の概念はなさそうだった。

その1・私、聖霊になるのこと（後書き）

10 / 10 加筆。

その2・私、真剣に考えるのこと

いつまでの岩の上に浮かんでいるのもつまらないから地面に降り立った。足の裏に違和感があり、見れば 草が物凄い勢いで成長していた。びびって片足を浮かせると瞬時に枯れていく。これは…リアルシシ神！

「ははは、なんてこった……まさかシシ神になるとは思いもしなかったよ」

夜にはでいだらばつちになるんだろうか、遠慮したいけど。サクサクと周囲を散策したら、どうやら私の移動可能圏内は岩を中心にした半径百メートルの半球という狭いものと分った。上空から見るに付近数百メートル内に川もなければ人の姿もない。……私の自我をここに持ってきた超的存在がもしいるというなら 何でこうなったのか是非ともお聞かせ願いたい。もし変な理由だったりしてみろ、ぬっ殺す！ じゃなかった、ぶっ殺す！

宝岩の前に着地する。膝を抱えて成長と死を繰り返す足元を眺めながらこれからの終わりが見えない人生を儚んでいると、カサリという音がして動物が姿を現した。鹿だ。つぶらな黒い瞳が可愛らしく、大きさからして成獣なんだろうけど首を傾げる所作やら何やらが一々可愛い。狙ってしているわけじゃないと分るからこそ癒されるというか。妹自慢になるけどあの子も可愛いんだよ、私がいくら無視しても泣きながら縋り付いてくるところとか本当に可愛かった。でもあの時はゲームの方が大事だったからウゼエとは思わなかったんだけど。妹よすまなかった、お姉ちゃんが悪かった。

「おいでおいで、メリケンかめやー」

駄目元で手招きしてみれば危機感なく近寄ってきた。ちよつこの鹿さんには危機管理について教育する必要があるそう。私が悪い人間だったらどうするつもりだったんだらうか。ゴードン・スミスみたいな頭の弱い勘違い野郎がいたらどうするんだ。あの野郎、

雉の狙い撃ちが好きな癖に鯉の生け作りを野蛮だとか書きやがった。野蛮なのは貴様だ。　　っと、いかん。考えが逸れた。

「よしよし、よーしよーし良い子だ」

頭を私に押し付けてきた鹿の頭をわしゃわしゃと撫でる。ん？

触れられる……？　ちよつとびっくりして両手を見下ろせば、やっぱり向こうが透けた体。透けているのに触ることができるとは何とも面妖な。つぶらな瞳が『もう終わりなの？』と言わんばかりに私を見上げてくる。笑いながら頭や首を撫でくり回していたら、笑い声に釣られて　　じゃないだろうな　　動物たちがどんどん姿を現した。

「肉食獣と草食獣がなんで同じ場所でリラックスできているのかは……気にしない方が良いな」

草食動物は逃げ出そうとせず、肉食動物は襲おうとせず。地上の楽園だと言わんばかりの光景が今、私の目の前に。どこのファンタジーだよおかしいだろう。でも突っ込んでもどうにもならない気がする。

「ふう……で、どうすりゃ良いんだろう」

私は自覚ありのゲーマーだ。戦国バ　ラとかそういったゲームは苦手だが、街を作って害獣駆除して、といったゲームはかなりやりこんできた。今日だって街を作っていたところを妹に襲撃されて、仕方なく出かけたのだ。楽しかったから良いんだけどね。だが、そのゲームの知識がどこで活かされると言うのか。ここらはただの森、それも人里もきつと遠い。何もしようがない。つまり私は暇人にして駄目二一ト。まるで駄目な女略してまだお。なんてこった　汗と涙の就活を終え、内定もらって内々定もらって、やっとこさ一月とちよつと働いたと思ったら。

そして私は失意のドン底へと落下した。人間と言うものは何かしらの役割を欲しがるもので、『何もしなくて良いよ、ただ存在していれば良いんだ！』とばかりに何をするでもなくただひたすら動物と戯れていなければなくなったら　　嫌になるのだ。色々と。

「何でだよ、ホント、何でだよ。こう言う時は神様が土下座して『テヘッ　うっかり手が滑ってYOUをKILLしちゃったんだ　願い事を三つ叶えてあげるから文句言わずに転生して』とか言うものじゃないのか？」

有無を言わず転生、それも宝岩の聖霊になるとかありえんティ！。

ひたすらグダグダと岩の周りで寝転がる生活を始めて数週間が経過。私は書くものがないのを悔みながら脳内でリリなの二次創作を展開させていた。あの作品どうなったんだろうか。作者さんが毎日更新してたからもう更新されているはずだけど。うん……女子向けの恋愛ものを考えていないあたり女を捨てている気がする。

見る人間がないから地面に転がってヨガしたり聖霊としての能力を試してみたり、まあ自由に気楽な生活と言えはそう言えるだろう。話し相手がさっぱりいないことを除けば素晴らしい生活だと私も思う。せめて画面の向こうにでも良いから話し相手が欲しいもん

だが……生身のお友達ができるよりも可能性は低い。

「あーいーうーえーおー」

口を動かさなければそのうち口の動かし方を忘れ、念話みたいなものを使って 力を求めるのですね、勇者よ…… みたいな腹話術をすることになるかもしれん。それはそれで恰好良いかもしれないけど、傍目から見たら何もつたいぶってんだこの女とは思えないから却下。

「かーきーくーけーこー。隣の客は良く柿食う客だ！」

あいうえお表を終え、今度は両手両足をバタバタとさせながら早口言葉や名台詞を叫びまくる。

「おれはからだは悪魔になった……だが人間の心を失わなかった！」
あれ、これって悪魔を聖霊に置き換えればまんま私のことじゃないか？ デビ マンだってこう言っているんだ、私も人の心を失っちゃいけないだろう。いつまで保つか分らんけど。私は元々人間なわけだし、人と会話しなきゃ自我を保ってられない弱い生き物だ。だから二次創作でよくある『俺はウン十年の間無人の荒野で修行し、ここまで強くなったんだ！』というのはよほど精神が人間を超越した出来でもない限り不可能だと思っているわけよ。悟りを開いた人なら別だけど、現代で高校生とか大学生していた人間が精神的にマッスルとは全く思えない。つまり私の健康的な精神状態は数力月から数年保てば良い方だと思われ、それ以降は人間を止めてファンタジー小説で良く出てくる滅私的存在になっているか、重度の躁うつ症になり理性的な会話能力を失っているかだろう。どっちも救いようがない状態と化している気がする。

「飛ばねえ豚はただの豚だ……」

そして会話を忘れた人間はただの猿だ。私は理性を保っているうちに会話の相手を見つけれられるのだろうか？ それとも理性を保ち続けるための術を見つけることができるのか。人間がこんな森の奥深くまでやって来るとは思えないから、後者の方が可能性としては高い。その一、私の精神的な時間を止める……やり方が分らん

から不可能。その二、とりあえずずっと寝続ける……この体でも眠ることができそうだから可能性はある。ただ起きられるかは不明でそのまま永眠するかもしれない。ちと怖い。その三、永眠するつもりで眠る。どうせ一度死んでいる。

「なんて三択だ……中の二つなんてすること一緒じゃないか」

ゴロンと転がって岩に背を向けなんとはなしに森の方を見れば口をあぐりと開いている青年がいた。平凡な見た目のどこにでもいそうなヘタレだ。見た目的に。

「……ん？」

驚きのあまり声が出ないらしい青年に目を瞬かせる。なしてこんな辺鄙な場所に人間が。早くお家に帰らないと村で待っているだろう恋人が泣くよ。実際にいるかいはいかは別にしても、両親が泣くよ。

「……ん？」

あれ、私ってばさっきまで何について考えていたんだっけ？

その2・私、真剣に考えるのこと（後書き）

10 / 10 加筆。

その3・私、守護聖霊になるのよ

青年の名前はエルというそうで、農民なのとか。そのエルが何でこんな森の奥深くにやってきたかを訊けば、何やら口ごもり視線が私と地面をチラチラと往復する。女々しい奴だな……こういう時代の男ってものは『黙っておれについてこい』タイプじゃないの？ 見た目は優男だし性格は軟弱で優柔不断だし、初めて出会った異世界人がこんなのだったと思うと泣けてくるね。身長だって高ければ良いというわけでなし、ただのひよる長い兄ちゃんではない。

「その……好きな人が、いて。その人に何かプレゼントしたいんです」

「はあ」

それがどうして私のところに来るのに繋がるんだ？

「だから綺麗な石をあげようと思って……」

「ふむふむ」

綺麗な石ね、なるほど。女の子って物は綺麗なものを喜ぶもんね。エルの恰好から見るに文化レベルは古代。もうちょっと文化が発展すれば宝石なんだと言うようになって来るんだろうけど、今のところ宝石は『他よりもちよっときれいな石』程度の認識らしい。カッティングの技術もないだろうし、宝石がちやほやされるまでまだ時間がありそうだ。

「だから、聖霊様の一部をください！」

「は？」

一部 ああ、この宝岩のことか。そうだよな、この岩綺麗だもんな。異常にでかいことを除けば女の子が喜びそうな色だし。よしよし、優しいお姉さんがここは一肌脱いで欠片をくれてやろうじゃないか。その欠片を基点に色々と周囲を見聞できるようになったら良いなーというこっちの都合は言わないことにして、聖霊になってから使えるようになった神通力で岩を砕く。細かい破片が散ったけ

どすぐに地面に吸収され、その地面からは私が踏んだ時のように草が急激な速度で成長し始めた。動物に与えたら凄いことになりそうだが 実験したら危険だろうな。某もののけのプリンセスのように巨大な獣が大量生産される気がする。そんなことをしたら私は本当にシシ神になってしまふ。それは是非とも避けたい。でも今みたいに植物にばかり『神の恵み^{マナ}』を分けてたら王蟲の森と化しそうで与えない方が良いのだろうか……？

「これで良いかな？」

「あ、あつ有難うございます！！」

我ながら良い仕事をした。自分の分身というか本体だからか、どうカットすれば一番綺麗に見えるかが分っていた。手渡せばエル君は嬉しそうに私の欠片を抱きしめる。さて、欠片と私の感覚は繋がっている。システムオールグリーン。よしよし。

「ところで。私の姿を視認できたのは君が初めてだ」

そんなのは嘘だ。

「と言うわけで君に私の加護を与えよう」

もちろん嘘だ。

「その石を大事に持っていてください。私が君を守護しているという証になるから」

我ながらなんといけしゃあしゃあとそんなことを言えるものだ。

数週間前までの私なら『嘘を吐くことに躊躇はないのか』と聞かれればあると答えただろうが、今の私はそんなことを気にしていられる状況じゃない。誰かと会話しなけりゃ理性を保っていらなれないのならコイツを使えば良いじゃない。

「せ、聖霊様……！！」

感動のあまり泣き出したエルをぞんざいに慰める。

「よしよしこよしー」

「うつ、うつつ……俺、村でもヘタレって言われて……！」

その通りだと思う。それからエルの愚痴は続き、役立たずやら木偶の坊、ウドの太木、果ては無駄飯食らいとまで言われているのだ

とか。つまりそこまで農民として絶望的だということ、ちょっとお兄さん生まれてから今まで何してきたのと訊きたくなった。お手伝いはしてこなかったの？ してきたでしょ？ なら何で出来ないの。体力がないならつけければ良い、畑を耕すのが得意じゃないなら練習すれば良い。

「で、でもっ、俺っ！」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら何か言い訳をするエルに、私はちよつとばかり失望した。文句を言うだけなら誰でもできるんだ。行動しめせずに嘆くだけの男なんて生きているだけで邪魔だ。無駄飯食らいと呼ばれる原因は本人にある。

私はさっさとエルを追い出した。あんなのと会話するくらいなら次の訪問者を待つほうが何倍もマシだ。早く次の人が来ないかな。と、そう思っていた時期が私にもありました。

『森の聖霊様の加護を頂いたんだ！ 俺が！』

誰が加護をくれてやると言った。そういえば言いましたそんなこと。

『俺は王になる……この国を統一してみせる！ 聖霊の加護は俺にある！』

加護なんてしとらんっちゅーに。

キングオブヘタレ・エルに渡した私の欠片を媒介にエルの周囲を觀賞していたら、いつの間にかあのヘタレ野郎は私の加護のもとにとかほざいて戦争を始めやがった。わたしの一部を削って作ったからあれ自身に癒しの効果があったらしく、私を使って怪我人を治すことで人気を得ていった。畜生私の欠片を返せ。くれてしまったものはもうどうにも取り返せないけど、こんなことになるなら私だつてあんな奴に野郎とは思わなかったさ。好きな女の子にやるんじゃないかったのかよ。なんで途中から配下に加わった美少女と乳繰り合ってるんだ？

そしてエルは国を建て、ご丁寧にも私の暮らす森を伐採して首都にしやがった。城の真ん中に安置された私はいそれと人の前に姿を現すわけにもいかず、またあのクソヘタレ男が死ぬまでは姿を現してなんかやるもんかと怒り心頭で岩の中に隠れてやった。そしてまた『俺の前にだけ姿を現してくださいさったん』とか言い出したから呪い殺してやろうかと真剣に思い悩んだ。でも一応私は『神^ナの恵み』の一部であって癒しと命の象徴だから呪殺できなかった。ちくしょう。

その4・私、王子と対面すること

私　　というか宝岩は、『神の恵み^{マナ}』の一種である日の光で大きくなっていく。宝岩に記録されている情報によると宝岩は空から降り注ぐ『神の恵み』の余剰分を集める機関らしく、私が集めなければ余った『神の恵み』が暴走する可能性があるのだとか。ついでに暴走したら街が王蟲の森になったりもののけプリンセスっぽい動物が大量発生したりする。試しに与えなくて本当に良かった。

ところで、私は今お城の中心に安置されている。屋根付き一戸建ての廟が建てられていて日光なんて浴びられるはずがなく……そろそろ大気中の『神の恵み』が許容量オーバーする頃なんだよな。大丈夫だろうか？　一応私の安置されている廟は風雨を防ぐだけのつもりだったのか壁がなく、周囲の『神の恵み^{マナ}』を吸収するには問題なかった。でも直接と間接では差が開いてしまうもので、この国が建国されてから早二百年ほど過ぎた現在は今にも水が零れそうなコップの状態だ。

でも私にはどうしようもないし放置してれば良いやと思って気にせずにいたら、各地で動物の巨大化や人里の樹海化が頻発し始めた。未知の怪物と急激な森林化により人々は恐慌状態に陥り、『きつと王家が何か悪いことをしたに違いない、聖靈様の罰なのだ！』とか言い出したらしい。良いぞ、もつとやれ！　原因の半分はその通りだ！

現在の王は小心者で、建国であるあのエルと性格がそっくりだった。自分に自信がなく、そのくせ巨大な権力に酔った節がある。甘い言葉を吐く者しか身近に置かず、それを諫めた者を左遷したり蟄居させたり、殺さないだけでしたがかなり情けない男だ。だから、その息子である王子も似たような性格をしていると思っていたんだ。父の背を見て子は育つと言うし、似たり寄ったりの坊ちゃんだとか思い込んでいた。

「聖霊よ！　もし私の声が届きますならば、どうか、どうかご降臨ください！」

それが思い違いだと分ったのはまあ、その王子様が私に直談判に来たからに他ならない。どうやら肉体派らしい彼は引き締まった体つきに軸のぶれない歩き方をした青年で、今の王より好感が持てる。彼は私を見上げて声を張り上げ、民草が無為に命を散らしていることを切々と訴えた。人間止めて二百年も経ったからだろう、人間に対する同族意識と興味が失せていた。だけど　助けを求めてくる者を無視するほど非道なつもりないし。

「私を呼んだのは君だね？」

さも今気付いたと言わんばかりに言えば、王子は迷いなく頷いた。長いこと宝岩の中で引き籠っていたから元の姿を忘れてしまった……仕方ない、微妙に覚えている妹の姿を借りれば良いや。

「貴方様が……ハッ！！　ご無礼を！」

私が現れたのに立ったままだったからだろう、王子は一瞬呆けた後跪いた。そのつもりがさっぱりなかったとは言え私は建国に関わった聖霊様なのだから。深々と頭を下げたまま王子はさつきと同じことを繰り返す言う。真面目な性分なんだなあ。

「各地では樹海が広がり、巨大化した獣が人を襲っております……聖霊様、どうか我らに力をお貸しください！　このままでは我が国は滅びてしまう！」

ガバツと顔を上げて懇願する王子にちよつとビビる。王子ってばかなりの美形じゃないか。私は美形が苦手なんだよ妹のハーレム思い出して。近寄るなシッシシ！　とかやったら泣くだろうな……。いくら私が美形嫌いでもそれとこれは別だよなあ。

「樹海の拡大も獣の巨大化も私の本意ではない。でも、君に力を貸してあげたいのは山々なんだが私には戦いの力はないのだよ」

「そんな……！」

私が癒し専門だということは意外に誰も知らない。私の加護が付いてるんだ　！！　とハッスルしたヘタレ王エルは戦争で勝って

国王に昇りつめた。だから戦の守護聖霊（ほぼ神様みたいな扱いを受けているけど）とか国の守護聖霊だとか言われ、癒しの部分は忘れられてしまったのだ。

「だが私とて出来ることがある。私を覆うこの廟を解体し、私を日光の下に晒しなさい。そうすれば私がどうにかしてあげよう」

こんなに真剣に民を思っている人なんだから助けてあげるべきだろう。民草のために心を砕いている王子には好感を持てるよね。よしよし、お姉さんが何とかしてあげようではないか。私が放置した結果だとかそういうのは気にしない方向で。

「聖霊様のお気持ちは有難く、その優しい御心に縋りたいのは山々。ですがこれは人がせねばならぬこと……聖霊様に頼り切っては我々は努力を忘れてしまう」

なんか恰好良いことを言い出した！ でも先に助けてって言いだしたのはそっちじゃなかったっけ！？ ほんの数分前のことのはずなんだけど、どうやら私は耄碌したらしい。二百年も生きているから記憶力にガタがきたんだろう。なんてこった……。

「二百余年の沈黙を破り私の前に姿を現してください。さうしたことは感謝の念に絶えませぬ。ですが御身を煩わすことは出来ません。まい御前、失礼いたします」

……言いたいことだけ言って出て行ったよあの人。自分が力を貸してくれて言っただけに、こっちが貸そうとしたら断わるのかよ。どっちだよ。困っているんじゃないのかよ。人の言うことを聞かないのはエルの血なのか？ 思い込みで突っ走るなよ！

私の行動範囲は周囲百メートルで、そして何の因果かは知らないが、私の置かれている廟の周囲百メートル四方は庭と神殿（といっても小さいものだけど）しかない。性根の腐った神官共の前に姿を現したくなんてないし どうしろというのだ。

そして数年後、あの軍人王子は右目を失って帰ってきた。流れ作業で王位を継ぎ、一生を巨大化獣（いつの間にか魔獣と呼ばれるようになっていた。可哀想に）や王蟲の森化した山林（いつの間にか死の森と呼ばれるように以下略）でアドベンチャーするのに費やした。人の話を聞かないとこういうことになるんだなと心から思わされた。

番外1・人、舌鼓を打つこと（前書き）

王子の出番が一回限りは寂しいぜ、ということぞ。

番外1・人、舌鼓を打つこと

大神官は今日も毎日のお供えを終え、背筋を伸ばし軽いため息を吐いた。毎日聖霊石に水と果物を供えるのは大神官の役割である。

季節の祭りや王室行事などのイベントがない今の時期はそれくらいしかすることがなく、あとするべきことと言えば割増請求で懷を温めようとする神官^{カン}ややる気のない神官^{ボケ}の評価を下げて彼らの給料を減らすことくらいである。

「ふ、ふ、ふ……」

大神官は昨日供えた果物を手にいそいそと自室へ向かう。前日のお供えものを食べるのは彼の楽しみの一つなのだ。前代の大神官は食わずに捨てていたらしいが、なんともつたいないことをしたものであろうか？ 聖霊石の前に置いておいた果物は『何故か』美味しくなるのである。食わずに捨てるなど出来ようはずがない。

軽くなる足取りを自覚しながら果物を入れた籠を抱き部屋へ入った。机の上に置いて棚から愛用の果物ナイフと皿を取り出し、サクリと食べやすい大きさに切って口へ運ぶ。じゅわり、と口の中に広がる果物の甘さと爽やかさに顔が自然と綻んでいき、彼は今日も聖霊に感謝の祈りを捧げるのだ。

「いやー、本当に聖霊様さまさまだよな。俺菜食主義者になっちまいそう」

以前試しに野菜を聖霊石の横に置いてみたことがあったが、この世のものとは思えないほど美味しかった。さすがに腐りやすい肉類を置くことはしないが、もし置いたらどうなるだろうかと思うと口の中に唾液が溜まった。

「大神官サイコー！ ふふふ、ふはははは！」

本来の彼は自堕落で不真面目であり、大神官などという責任の大きい仕事などお断りだと思っていた。だがすべては果物のため、食は人間を変えるのである。また彼は生来体の弱い性質であったが、

大神官になつてから病氣知らずで体力もついた。まさに聖靈のご加護だと彼は信じている。

果物もあと三切れを残すばかりとなり、彼は明日に思いを馳せながら残りを味わっていた。大神官としての義務も責任も、美味しい食べ物の前には軽いものである。彼は毎日が幸せだった。

だが幸せとは不幸があるからこそその素晴らしさが分るものである。聞こえてきたのは幼馴染である男の大声、悲痛とはかくあらんと言わんばかりの悲鳴、「大神官様呼んで来い！」という叫び声。彼は立ちあがった。皿の上にはまだ二切れ残っていた。

「どうしたのですか？」

「大神官様……ああ、陛下が！」

なぜなら彼は大神官。いくら彼が本当は口が悪いとしても、それ

を下級神官たちの前で披露するわけにはいかない。最近は一丁寧語も板についてきた気がする。

部屋を出て騒音の元へと向かえば、両腕に神官たちを鈴生りにした背の高い男が暴れまわっていた。男は魔獣により右の視力を失ったはずだが、どうして右の死角から飛びかかる神官を殴り伏せられるのかはなはだ疑問である。

「陛下！」

大神官は男に　この国の王に走り寄る。これ以上暴れられては神官たちが大怪我をするだろう、止めねばなるまい。王はその強面をピクリと動かしただ。それが笑っている証しだと分ってしまう彼は自分が悲しかった。

「大神官様！」

「助かります、ああ、陛下をお止してください！」

涙眼の神官たちがわあわああと彼に縋り、縋られても邪魔でしかないので振り払う。彼と国王の身長差は頭半分ほどであるうか　彼は国王を見上げながら長嘆息した。

「今日は一体何の御用ですか、陛下。また聖霊石の前で数日過ごされるおつもりで？」

「その通りだ。聖霊様の前に立ち、聖霊様のご降臨を待つ」

「降臨されるかも分らないのに？」

「必ず来られる。一度私のために降臨されたのだから」

降臨しないと納得するまで聖霊石に話しかけるのだろうが、はっきり言って迷惑でしかない。政務は滞るし神官たちも緊張して失敗を繰り返すし、いい加減諦めてくれれば良いものを。

「……皆さん、陛下を放して差し上げなさい。陛下はこうなったら意地でも人の話を聞きませんから」

国王は人の話を聞かないというか、人の話を曲解して自分の良いように解釈する天才である。彼はこれと幼馴染をしてそろそろ三十年になるうとしているが、一緒にいて得たものは学力や優れた人間性ではなく譲歩と諦めであった。

「ですが大神官様！」

「陛下が人の話を聞かないのはいつものことではないですか。もう諦めるべきです」

そう。諦めこそがこの国で出世する第一歩なのだ。悟った表情でそう説く大神官の姿はその場の皆　国王以外の　心を打った。そういえば大神官様は陛下の幼馴染だったよな、じゃあ俺たちの何倍も苦勞されているんだろう。大神官様お可哀想に……！

神官たちは渋々国王を放し、国王は当然だと言わんばかりに鷹揚に頷くと聖霊石の元へと向かった。その背中を見送り、大神官は集まっていた神官たちに命じる。

「陛下などこの場にいないと思って行動しなさい。緊張のしすぎで怪我などしたら大変ですからね」

あの男を風だと思えばさほどイラつかない。風はただ吹くだけであり、こちらが説得して風向きを変えようことなどできるはずがないのだから。

そう言い切った大神官に皆涙する思いであった。ここまで悟るのに彼は一体どれほどの苦勞を重ねてきたのであろうか？　自分の代わりに嘆く彼らを置いて、彼はさっさと自室へ戻る。他人の慰めも同情もいらぬ。彼が望むのはそう　美味しい果物だけであった。

その5・私、少年に会うのこと（前書き）

今回はつなぎのため少しいつもよりも短いです。

その5・私、少年に会うのこと

だんだんと巨大化獣や樹海化が皆に『当然のこと』として受け入れられるようになり、数十年もすれば天罰だとか天変地異だとか言わなくなっていた。私は私で必死に『神の恵み^{マナ}』を吸い取ってどうにかしようとしているけど、直接と間接じゃあやっぱりどうにもならないものがある。巨大化獣、ゲリラ的樹海発生に続き　ついに、人にも影響が出始めた。魔法を使える子が出てきちゃったのだ。

『神の恵み^{マナ}』は基本的に種の可能性を最大限に引き出すことを目的としている。つまり私の一部を使ってエルが披露した癒しの力も私が踏んだ場所から草がスピード再生みたいに生えるのも、私が人体の回復力を最大限に引き出し草の生命力を最大限に引き出したが故なのだ。でもまあ一応私にも可能なことと不可能なことはある。攻撃を目的として『神の恵み^{マナ}』の力を使えないことだ。攻撃対象なんていないから別に良いんだけどね。

話はちよつと戻るけど魔法の話。ここ二、三十年で大気中の『神の恵み^{マナ}』を吸収して利用できちゃう子が三百人に一人くらい現れるようになった。神殿は私の加護だなんだと言ってその魔法使いもどきたちを神殿に集めて教育しているみたいけど……プロがいないんだから十分な教育ができるはずがない。本当に大丈夫なのかよアレ、と思いながら観察していたら　少年が一人、私の元へ通うようになった。

どうやら彼は私が今までに見てきた子の中でも一番魔力、じゃなかった、『神の恵み^{マナ}』の精製度が高い。でもその高さが原因で魔法の効果が良すぎてしまい、皆から怖がられるわ嫉妬されるわ神官はあからさまに優遇するわで大変なようだ。神殿内には友達がいらないうえ神官たちは甘い顔をするばかりで役に立たないとなれば、どこかで一人にいる他ない。少年は私の傍を選んだらしい。

しょんぼりとした様子で膝を抱える少年を見ながら、私は悩んだ。私も手伝えるなら手伝ってやりたいのだ。でも私までこの子を優遇してしまえば他の子たちはどう感じるだろう？ 更にこの子を敬遠しやしないだろうか。この子の未来を逆に奪うことになりやしないか。私は逆立ちしてもこの国の『聖霊様』という立場に変わらない……神官の鼻屑とは影響力がケタ違いなのだ。

少年を助けようと決心したのは五日後のことだ。少年が私の影に隠れるのはここ数日いつものことだったが、彼は泣いていたのだ。ぐずぐずと鼻を鳴らし私に寄りかかり、縋るように『聖霊様……』なんて言われたら私だってほだされる。妹の姿でも良かったけど光の玉として少年の前に現れれば、彼は私を見て口を半開きにした。「少年、どうして泣いているんだい」

大神官が少年を鼻屑して甘やかしているというが、前々代の大神官は金より食い気だったからまだ可愛げがあったのに今代の大神官は花も欲しい団子も欲しいといういけすかん奴だ。自分の手元で少年を育てたら将来儲かるに違いないとか考えている肉饅頭なんぞ肉屋で売っても安く売り捌かれるに違いない。私は手を伸ばして少年の頭を撫でる。

「えっ、聖霊様……？」

「そうだよ」

少年はなかなか将来が楽しみな顔立ちで、もしあの大神官がこの子の将来じゃなくて尻を狙っていたりしたら今すぐ王でも誰でも良から人のいるところに行って大神官のあることないこと言いふらしてやろう。

「大きな力が怖いのかい？ 人を傷つけてしまうことが」

頭をなでたまま言えばコクンと頷く少年。素直だ……王族とは大違いだな。あいつらは人の話をさっぱり聞かん。それに人を傷付けることを怖がる怖がらない以前に無意識で傷付けているから性質が悪い。

「私がい方を教えてあげよう」

『神の恵み^{マナ}』の塊である私が教えるんだ、どうすれば効率良く力を使えるかは私自身が良く分っている。さあ、最強への道を歩むのだ少年よ。大丈夫、『神の恵み^{ほんにん}』が付いてるから問題なし！

「良いんですか？ 僕なんかに教えて下さるだなんて……」

少年は目を潤ませ私を見上げる。少年の目には私はただの光の塊としか映っていないだろうから私の表情が分るはずもないが、私が苦笑したら安堵のため息を吐いた。雰囲気分ったのかもしれない。「少年は『神の恵み^{マナ}』について知っているかい？」

「マナ、ですか？ 知らないです」

そうだな、まずは魔法使いが生まれた理由から話そうか。

その5・私、少年に会うこと（後書き）

少年の名前を募集します。どなたか少年の名前を考えてくれませんか？

驚見にはネーミングセンスがなく、いくつか考えてみましたが全然似合わず断念しました。ヨーロッパ風の名前なんて嫌いだ。和風の名前だったらまだいくつか考え付くのですが　と言いつつ、主人公の下の名前もまだ考えていないんですよ。名字だけは決めましたが、名前だけが決まらない宙ぶらりんです。これもついでに考えてくださると助かります。

その6・私、仕事を語るのこと

天地創造って言う新興宗教みたいで嫌なんだけど、実際にこの世界を作ったのは神様なわけ。信じられない？ 信じたまえ。そういうことになってるんだから。で、ただ作っただけじゃ不毛な土地が広がるだけだから種を作ることにした。それが初めの植物。次に作られたのは水にすむ動物で、それから八虫類とか鳥類とかの卵生動物。最後に胎生動物を作って終わり。なんだけど、ただ作っただけじゃ同じことを繰り返すだけの機械みたいなものにしかならなかったんだよね。つまり生まれて育って交わって産んで死ぬ。ひたすらそれを繰り返すだけの世界には当然飽きが来るもんで、神様は『進化』を促すことにした。つまり種類を増やさせて多様化させようと思ったのさ。

でも放っておいても進化するわけない。そう『作っちゃった』んだから。だから全ての生き物に行き渡るように『一部の遺伝子情報を壊す』成分を光に混ぜて注ぐことにした。もちろんそれだけじゃ進化じゃなくて退化して行く一方だから『遺伝子を修正しつつ直す成分も入れておいた』。

壊す成分は量が少なくても問題ないけど、直す成分は壊す成分以上に必要だからどうしても過多になる。多すぎたら多すぎたで良いかなと思っただけ、とりあえず自分が調整しながら進化を見守っていかうと神様は考えた。で、その調整するための基点が私が今憑いている宝岩だったりする。余った直す成分を吸収し、貯蓄することで大気中の直す成分。つまり『神の恵み』の濃度を一定に保っていた、のだけど。ある日、いつまでも神様自身が調整していたら自分の思っただような世界にかなりようがないと気付いたらしい。そうだ、他人に任せよう！ と。

長い年月一人ぼっちでも問題なさそうまで連れてきても問題ない魂を探していたらしい神様は、ちょうどトラックに撥ねられて死んだ

私に目を付けた。戦争を好むような人間でもないし趣味はネトゲの街作り、生にそれほどしがみ付いていない（ついでに今しがた死んだというオマケ付き）　本当にちょうど良かったらしい。

そして私は（何の説明もなく）聖霊様にされ今に至る。なんのフオローもなかったから始めこそあの野郎と思わなくてもなかったけど、一度死んだ命だし生きている（？）分だけ儲けもんだと開き直ったら気にならなくなった。ただ人恋しかっただけで。数週間でエルが現れたのは本当に幸運だった……エル以外で私のところに来た人間いなかったんだよ、五年くらい。その点ではエルに感謝しても良いかな、その点だけは。

とまあ、神殿関係者が秘匿しておきたいだろう部分や個人的な部分ははしりつつ話す。少年もこの国を建てた高祖がとても残念な厨二病患者だったなんてことを知りたいとは思わないだろうし、もし話したとしてもただの愚痴になる気がした。

少年は難しい顔をして唸り、頭を掻きながら伏せていた顔を上げた。

「えっと……じゃあ、そのマナていうのが沢山余ったから、僕たちの体質が変わったってことですか？」

「うん、そうそう。でも体質が変わったというより新しい機関ができたっていう方が近いかもしれないな」

たとえば腕が二本から四本に増えるようなもんだよと言えば少年は恐怖で顔を凍らせた。　どうやら喩えが悪かったらしい。腕が四本つてのは怖いのか……顔が三つで腕が六本ある元武神を「アシユラたん萌え！」と萌えキャラ化している日本人でもなきや受け入れ難かったのかもしれない。私なら腕が四本あるならもう一つ顔を付けると注文するけど、少年には怖い話でしかなかったみたいだ。

「あー……うーんと、少年は腕が一本じゃ不便だと思うよね」

とりあえずフオローしておこう。

「うんと、はい。不便です」

「そう。人間は腕が二本あるから色々なことができる。じゃあ三本

あつたら、四本あつたら、もつと便利になるとは思わないかい？」

まあ、そんなことになったらマルチタスクが必要になってくるけど。右手と左手に別々の動きをさせようとするのは中々骨が折れる。しかし少年がそんな現代知識を知っているはずもない。頭に添えていた手を顎に滑らせ、少年はうーんと首を傾げた。大は小を兼ねると言いはするが大きいすぎるのは逆に不便になるけど、今言いたいの

はそんな話じゃない。

「思います」

「魔法を使えるというのは見えない腕が出来たようなものと考えれば良い。その腕をどう動かすかをちゃんと知れば力の暴走も起きないし今以上に便利になる」

なるほどと何度も頷く少年の旋毛を見ながら、さてこれからどうしようかと考える。何か呪文とかあった方が良さだろうなあ……魔法の呪文とか、私に厨二病患者になれというのか？ こっぱずかしくて穴掘って埋まりたくなるわそんなこと。教えると決心したならしたでもっと考えてから行動しろと怒られそうだが、どうせ私は元から行き当たりばったりなんだからさして気にするほどのことじゃない。

とりあえず、今私がすべきことは。

「さて、だいぶん時間を食ってしまったようだな」

廟の外を見てみれば日はだいぶ傾いていた。おやつ時に少年がここに来たことを思うと長い間話していたようだ。もう夕食の時間だろうし、長時間姿の見えない少年をそろそろ神官が探しに来るかもしれない。今中途半端に行き当たりばったりな知識を与えるより明日話す方が良い。

「神官も心配しているだろう、お帰り。また明日教えてあげよう」

今晩は呪文をどうするかで悩まなきゃいけないから、とりあえず少年よ、帰ってくれ。

その6・私、仕事を語るのこと（後書き）

文字数は22222だそうです。キリ番って良いですね。

少年の名前は依然募集中です。一つ候補を頂いて万歳三唱しました。ついでに主人公の名前も募集中だったりします。

その7・私、呪文を考えること（前書き）

しばらく開きました。なんだかちょっと出来が悪い気がします、
何日かおかないと冷静に推敲できそうにないです。

その7・私、呪文を考えるのこと

人間だったころ、英語はまああの出来だった。とても良いとは言えないけどだからと言って悪いわけでもない平均値ちよつと上。だけど　流石に三百年近く英語から離れてると思いだせるはずもない。カタカナ英語ならまだどうにかなくても、普段使わない単語はもうすっかり忘れてしまった。

魔法の呪文を英語にして『ファイア！』とか言わせようかと初めこそ考えたものの、単語に関する記憶が頼りないから諦めることにした。もう日本語を呪文にすれば良いだろう　ちよつと痛々しいことに目を瞑ることにして。

この世界に来て三十年くらいしてから気付いたことだが、どうやらこの世界の言葉は日本語じゃない。そりゃ異世界だから当然なんだけど十年単位で気付かなかった。どう見ても相手がしゃべっている口と私が聞く言語の間に差異があるのだ。自動翻訳機能だろうかと思って集中してみればその通りで、きっと神様が言語で困ることがないようにと、少ない頭を捻って考えてくれたんだろう。それはそれで嬉しいが、それよりも先ず私の意見を聞いて欲しかった。問答無用で聖霊にするとか、私の人権はどこへ行った？

で、相手が話している言葉を覚えようかとも思っただけで面倒だったから止めた。どうせ自動翻訳機能が働いているのなら、わざわざ覚える必要なんてない。それに私は訳の分らん言語よりも日本語を聞いていたかった。

で、だ。つまりこの世界では日本語は『存在しない言語』だということだ。外国語というものはなんとなく恰好良いように聞こえる気がするし、多少発音がおかしくてもそれに気がつく人間などこの世界には私以外に一人もない。実のところ呪文なんてどうでも良く、本人にとってイメージが湧きやすい言葉であればどんなものでも良いのだ。とりあえず『私にとって』分りやすいものにしたがそ

のうち自国語に直す運動とかが起きるだろう。

さて、漫画の記憶もあやふやだから漫画からネタを引っ張ってくるのは無理だ。なんとなく覚えていて漫画の技そのままになることがあるかもしれないが。少年が来るまであと数時間しかないから早く考えなければならぬのだが、そう思えば思うほど何も出てこなくなる。『想像すれば思った通りになる』とかは、見本があるからこそのことだと思う。言葉がなくても脳内のイメージを投影することで魔法を使っているんだ、きつと。

投影 そんな名前の魔法を使った漫画だか何かがあったと思うが、もう覚えてない。そういえば現世は『本質界の陰の投影である』とかいう考え方があったはず。プラトンだったかソクラテスだったかは覚えてないが、そんな考え方を誰かが主張していた、はず。確か『それぞれの存在のひな型であるアイデア』が本質界に存在するかから私たちはその物質が何なのかを判断することができる、とかいうものだったと思う。

せっかく呪文を唱えるなら何か恰好をつけた方が良かったろう。よし、決めた。呪文は『世に のアイデアを投影する、云々』で良いだろう。なんだかそれっぽくて恰好良い ような気がしないでもない。

「『世に水のアイデアを投影する、凍る大地』みたいな」

効果があると確信しつつ地面に指を向ければ床に氷の膜が走る。

あまりイメージを固めることなく作ったからか白濁した氷で、記憶の中の氷とは透明度がまるで違った。ため息を吐いて氷を溶かせば、溶けた水は地面を濡らすことなく気化した。

「んー、まあとりあえずこんなものかね」

私は無事一仕事終えることができたような爽やかな気持ちで背伸びを一つした。実体はないから肩が凝ることはないのだが、実体があったときの癖は何年たっても抜けないものだ。

ついでに、私は途中で放り出して『後は自分で考える』と言うつもり満々だ。自分が教えると決めたくせに無責任な奴といわれるか

もしれないが、魔法というのは本来自分たちで高等なものにしているのが正当な進化なのであって私の介入は本来ないはずのものだ。それをちよつと早める手伝いまではするが魔法体系の完成まで付き合うつもりはさらさらない。言うなれば『応援している』だけだ。

「聖霊様！！」

そんなことをつらつらと考えていたら、少年が来る時間がきていたらしい、少年が笑顔で廟に駆け込んできた。

「おー、よく来た」

彼から私が見えるようにして現れれば顔をパアと明るくする少年。そういえば少年の名前って何なんだろうか。呼ぶ時はどうせ少年と呼びかけているから不便ではないが、名前があるのだからそつちを呼んだ方が喜ぶだろう。まあ、名前を聞くのは面倒だからすぐにはしないが。

「良いか少年、要はイメージだ、イメージ。想像するんだ。どんな結果を望むのか想像しながら唱えるのが一番の成功への近道だ」

「はいっ！」

「じゃあ私がまず見本を見せるからね。『世に水のアイデアを投影する、凍る大地』」

「す、すごい……！　すごいです、聖霊様！！」

「ハハハハ、凄いだろー」

後から考えればかなり痛々しかった　いや、魔法使いという時点で痛々しさはにじみ出ているのだが、考え付いた呪文は『厨二病患者カモン！』な出来だった。だがだからと言ってほかに何か考え付くかといえばさっぱり思い浮かばず、思い出せる魔法の呪文にできそうな英語は『ファイア』『ウィンド』『ブリザード』くらいだったから仕方なかった。

その7・私、呪文を考えること（後書き）

少年の名前はリヒトに決まりました。 冴木遥様ありがとうございます！

主人公の名前はいまだ考え中＆募集中です。

その8・私、ため息を吐くこと（前書き）

週一連載と固定した方が良い気がしてきました。

その8・私、ため息を吐くこと

神様がどうして人間を作ったのかをなんとなく濁し、とりあえず神様がいてYOU達のことをずっと見守っているんだよと教え

魔法の使い方を優しく教えてあげた私はいつの間にか、聖霊様ではなくご神体と思われるようになった。曰く、神様がこの岩に降臨して少年　リヒトに魔法を教えたということらしい。なんでだ。

「神様！」

ちよつとおバカな少年リヒトは呼び方を変えるし、神官たちは伏せた顔をにやけさせながら私を拝みだすしで本当に迷惑極まりない。そろそろリヒトの修行を投げ出そうと思っているから良いのだが。

リヒトを教え始めて一年と半年が過ぎ、十歳かそこらだったリヒトは十二歳になっていた。西洋人の血だからだろうリヒトの背はメキメキと伸び、顔にはうつすらと髭が生え始めている。人間だったころ外国語の先生から聞いた『髭面の小学生』とはこういうことかと少し悲しくなりつつ、でもそろそろお別れだと思うと清々した。ガキは嫌いなのだ。

「神様、おはようございます。　えっと、僕の二ホンゴ、どうでしょう？　ちゃんと話せてますか？」

「うん、だいぶ上手になった」

そう。リヒトは今日本語を話している。呪文を日本語にしたため新しく何かの呪文を作るには日本語を知らなければ不可能で、身から出た錆とはこのことかと内心涙しながら日本語を教えたのだ。一度日本語で教えてしまったことだし後から変えるのははばかられ現在に至る。毎回確認をとってくるが、リヒトの日本語はかなりのものになっている。

「じゃあ練習を始めようか」

「はい！」

リヒトは真剣な顔をして右手を突き出し呪文を唱える。私は口元

をおさえる準備をした。

「『世に風のアイデアを投影する。荒ぶ嵐』」

毎回噴き出すのを我慢している私は不謹慎かもしれないが、自分で考えた法則ながらなんて厨二的なんだろうか。年齢的にもちょうど良い年頃だし　まあ、髭が生えているのは見ないことにして

僕は選ばれた勇者なのだからに恥ずかしい呪文を唱える子供の姿はかなり微笑ましかった。美形と厨二患者は良く似ている。主に自意識過剰な点で。

どうやらリヒトは風と水が得意らしくその二つを精力的に伸ばす努力を怠らない姿には感心するばかりだが、やはり現代人の想像力とこの世界の住人の想像力には大きく差があるようだ。なんというか、少し物足りない。もっとうこういう使い方をすれば良いのに、ああいう使い方はどうよ、と思いつつも言わない私は教師失格かもしれない。でも雇われた家庭教師というわけでもないしそこまで懇切丁寧にしてやる必要性もない、また私は魔法の使い方を理解する手助けだけしかするつもりがない。自分で気付くか、弟子とか孫弟子あたりが気付けば良いだろうと思っている。

「はあ、はあ……どうでしょう、神様？」

リヒトが振り返って私を見た。私は『神の恵み』の塊だし肉体などないから無限に魔法を使えるが、リヒトたち人間は自分の体内で『神の恵み』の精製を行わなければならないため体力が削られていく。リヒトから聞いたことによると精神的疲労も強いらしいから、きつと精神力も使うんだろう。人の身とは不便なものだ。

キラキラとした目で私を見つめるリヒトに、まさか『見ていませんでした』と言えるわけがない。それにリヒトの実力は毎日見ているから問題ない。『神の恵み』の精製に失敗して暴走させた様子もないし、そろそろ手放しても良いだろう。いつそのこと今日おサラバしてしまおうか……この一年半リヒトの修行を毎日のようにつけてきたが、本音を言ってしまうばもう面倒くさいのだ。呪文用に色々形容詞とか教えたし、日常会話に困らないほどの日本語能力をリ

ヒトはもう身に付けているし、私がまだ教えるべきことなんてもないと思っている。あとは自分で考えろと突き放しても構わないだろう。

「うん。合格だね　リヒト、もう私が君に教えるべきことはない」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ。だから今日で君の修行は終わりだ。君はこれから自分の足だけで立つんだ」

言外に『もう私は君の修行を見ないよ』と匂わせるとリヒトの顔が紅色から真青に転落した。おいおい、どうしてそんな顔をする。こっちは貴重　でもない時間を割いて君のために使ってきたんだ。有難うございましたくらい言いたまえ。

「そんな神様……！　僕を見捨てるんですか!？」

両膝をガクリと突き呆然と私を見上げる。眼球の運動が激しい。これ以上ないほど動揺しているのが分る。

「見捨てるんじゃない。卒業するんだ。いつまでも師におんぶにだっこではいけない」

私はもう疲れたんだよ！　ガキの子守なんぞ本当は嫌だったんだ！　と言ったらリヒトの中の私の理想像が崩れる気がする。私はそこまで鬼ではないつもりだ。

「うっ……神様……」

リヒトが俯いて目元をこしこしと擦る。視力悪くするぞ。

「わかり、ました……神様」

リヒトは顔をあげ私を見上げる。今の私は光の玉だからどこに目があるとか分らないんだろう、リヒトは微妙に私の眼の位置からずれた所を見つめ、コクリと一つ頷いた。

「神様から、卒業します」

「うむ」

「さ……」

さ？　リヒトの目から新たに涙がじわりじわりと浮かび、零れそうなほど目尻に溜まる。

「さようならあ　　！！」

泣きながらリヒトは走って行った。前を見ずに走って神官に正面衝突し横の階段から転がり落ち、足の骨を折って一カ月の間安静にせよとの診断が下りた。騒がしいガキだった……仲間外れにされて泣くおとなしい子だと思っていたら意外に騒がしいガキで早く次を教えるこれは何だと私を質問攻めにし、疲労困憊　肉体がないから精神的なもののだが　した私に笑顔で『また明日！』と言い捨てて帰っていくような奴だった。ついでに言えばお礼を言えないガキだった。最後まで言うわなかった。

「……もう人間に関わるの止めようかねえ」

この世界の人間たちはみんな、個性がありすぎて困る。

その9・私、懐かしい顔と会うこと

うざいばかりだったリヒトだが、やはりいるのといないのでは違うというものだ。この一年半で私はリヒトに引きずられてしまったのか、慣れたと思っていたはずの『会話相手のいない生活』に物足りなさを感じていた。確かこれを人は寂しいというのだったか。頭のどこかでリヒトが来ないかと期待してしまっていることに顔をしかめる。リヒトはもうここに来ないだろうか。もし来たら……

「リヒト兄ちゃん、二ホンゴ教えて　　！！」

「よし、僕が教えてあげよう！！」

いや、やっぱりリヒトなどいらんな。

ちびつこたちの求めに応じ、私の收容された廟の前にある広場でリヒトによる日本語講座が行われる。なんと言えば良いのだろう、リヒトの言葉が押し付けがましく偉そうだ。私の教えを受けたという鼻厘の結果だと考えると後悔するばかりだが、ああ育ったのは本人の元々の性根もあるからそこまで私が気に病むこともないだろう。それにリヒトはまだ十二歳なのだ、有頂天になってしまふのはしかたない。

リヒトは嬉々として年下の子供たちに教え始め、年上の子供たちは自分より年少のリヒトに訊きに行くのは自尊心が許さないのか遠巻きに見るばかりだ。さつさと聞け、聞くは一時の恥聞かぬは一緒の恥というだろうが。だがまあ、気持ち分らんでもない。あのむかつく餓鬼に頭を下げるのはかなり嫌だ。

「あの餓鬼がもうちょつと頭良ければ良かったんだが……」

「子供とは総じてそういうものですよ」

「いや、昔はもつとましだった　ん？」

今代の大神官は前代の大神官を謀殺した、あんまり私の気に入らない奴だからあいつの前では私は絶対に出ない。リヒトが大神官に手を引かれてやってきた時だって岩の中に隠れてさつさと帰れと念

じていたくらい嫌いだ。前代と前々代は良かった。良かったんだ。

「大神官……？」

そして、私の背後に立っていたのはその前々代の大神官、無類の果物好きだった面白い奴だった。死んだとばかり思っていたんだが。生きていたのか。

「お久しぶりですねエ、十年ぶりでしょうか」

この男、魔獣クンたちが現れ始めた時の王、なんたらくんたら王とかいう奴の幼馴染だ。目の奥底には達観に似た諦めが宿り、口元はどうにでもなれと言わんばかりの苦笑が浮かんでいるのがこの男の大きな特徴で、昔はピチピチの青年だったが、当然ながら今はしわくちやの老人。さつさと死ねとは言わないがとくに死んだものだとはかり思っていた。この時代には珍しい　というよりはありえない、八十路（くらい）の怪物だ。

「何で私が見えるの」

「いつの間にか、そうですねエ、ざっと三十年ほど前からでしょうか？　どうしてでしょうねエ」

聖霊様のお力が宿ったものを食べ続けたからでしょうかねエ、と
か言いながら禿頭を掻く怪物　名前忘れた　はそういえば、私
へのお供え物だった果物を毎日食っていた。

「またあの味が食べたくなりましたしてねエ、いえ、ただの果物の酸っぱさに嫌になりました」

これからまたよろしくお願いしますねと微笑む怪物、否、元大神官は、ギラギラとした目で私の前に供えられている果物を見ている。捕食者の目とはこういうのを言うんだろう。

「……持つてく？」

「ええ、もちろん」

と、元大神官の後ろから若い青年の呼ぶ声がし、そっちを見やれば見慣れない顔に首を傾げる。神官服を着ているが、私の前で神官の誓いを行っていないはずだからまだ神官服を着ては駄目なのではなかっただろうか。足音がしっかりしているし、軍人かもしれない。

「ハウル」

どうやら若い神官もどきの名前はハウルというらしい。脳内検索にしゃべる火の玉が出てきたけど、ホラーものでハウルなんてキアラがいたんだろうか。よく思い出せない。

「ここにいらっしやっただんですね、探しましたよ。ご老体なのでから付き人を撒かないで下さいと何度も申し上げますのに……」

「まだ私は若いですよ、君と同じくらい若いんですから」

「まさか！ 長老様はもう八十六歳でいらっしやるでしょう!？」

日本人の平均寿命もそれくらいじゃなかったか？ 現代日本人と同じくらい生きるとは この時代では本当に怪物でしかないぞ。

この爺さんが大神官をしているうちに三回国王が変わったし、そしてついこないだも傀儡政権だろうとしか思えない五歳児の国王が立つたばかりだ。まああの餓鬼も、私が見る限り今までの王族と同じく人の話を聞かない天才ならぬ天災なんだが。

「ふふふ、聖霊様のご加護のおかげですよ」

「え、え……」

「それにしても、私が旅に出ている間に神殿は変わりましたねエ」

周囲をグルリと見回し『全国津々浦々果物を巡る旅なんて出ない方が良かったかもしれません』とかうそぶく元大神官に、こいつはそんなことのために大神官の仕事を止めたのかと頭が痛くなった。

私のせいなのか？

「ところでハウル、その格好は一体何ですか？ 君は私の護衛役であつて神官見習いではないはずですが」

神官服を着ることのできる条件として、私の前でお決まりの誓い文句を唱えそれを守ることを宣誓する必要がある。私としては勝手にやってるとしか言いようがないが、神殿関係者からすれば見逃せないことらしい。

「あ、これは大神官殿が神殿にいる間はこれを着用せよと仰られたので。軍服はやはり神殿内では異質なんでしょうか」

「そんなことはありません。例えばとしては不適當ですが、かの王は

ご存命の時、魔獣退治から着替えぬまま聖霊岩に会いによく来られていましたから」

血のおいをぶんぶんさせながら『何故顕現して下さらぬのか、聖霊様！』とか睨みつけながら言われたからなあ……あれと会話するのは嫌だったし、それに血の匂いが濃くて近寄りたくなかった。岩の中に引っ込んで、そう言えばこれリアル天の岩戸だなとか考えていた覚えがある。流星に五十年近く前のことだからもうあんまり覚えてないが。

「神官の誓いをしておらぬ者に着せるほど神官服は安いものではないのですがねエ……あの馬鹿、おっと口がすべりました　大神官殿は何をしていらっしやるのやら」

「これってそんなに金かかっているんですか？」

「ここにも種類の違う馬鹿がいたのでした……さて、ハウル。大神官殿の元へ案内してください。いえ、先に行つて私が向かっていることを伝えてくれますか？」

元大神官は前から思っていたが口が悪い。王族のほとんど全員は人の話を聞かない嫌なスルースキル保持者だから、この男がさらりと毒を吐いてもそのまま流していた。耳聡いというか王族の中ではマシな奴等（人の話を聞かないのが王としての資質だとも思われているのか、そういう人間は王になれず臣下に下っていく。物凄く残念）はこの元大神官の言葉に目を剥いたり肩を震わせたりしていたが、ほとんどは自分に良いように解釈してスルーしていた。こんな王族で良かったねと言うべきなのか彼を王族がこんな人間にしたと同情するべきなのか分らない。

「はいっ！」

元大神官の言葉を聞き流したのか聞き逃したのか、ハウルはビシリと敬礼した。長い袖が勢い良く振られて顔に当たり、彼の頭の残念さをとても悲しく思わせる。軍人らしくガツガツと歩く様子はなんだか微笑ましいが、脳みそまで筋肉に侵されていることを考えるとハンカチ一枚では足りない。

「では頂いて行きますね」

「あー、うん。面倒事は起こさないように」

元大神官は返事を待たずに果物の入った籠を取り上げ、私の言葉に意味深にニヤリと笑むと怪しい笑い声を上げながら去って行った。

「なんか、何か起こりそうな予感がする……」

そして、その予感は当たるのだ。

その10・私、必死に考えること

元大神官が倒れたという噂は神殿内を駆け巡った。帰ってきてすぐに病気で臥せるなんて、と皆さんは大混乱だ。もう年だからないんじゃないかと私はこっさり思ったけど、周囲の方々は八十まで生きたんだからまだ生きるに違いはないと思い込んでいるらしい。まあ、見るからにピンシヤンしてあと二十年は死にそうに見えなかったからそう思うのも仕方ない。老化によるガタというものは突然現れるものだ。

今代大神官は私に必死に祈りをささげ、何を祈っているのかと思えば元大神官の回復だった。あんまりに必死な様子にちよつと意外だ。黒幕はお前だとばかり。いや、あの男のことだから仮病を使っているのだと思って見舞いという名の確認に行っただけで、本当に真っ青な顔をして額に濡れタオルを置かれていた。本当に何か悪いものでも食べたみたいに下痢と熱の症状を出している。一体どうしたんだか。

「ああ、神様。助けてください……前々代様をどうか、どうか」

原因がこの男にはないようだし、一体何がどうしてこんなことになったのやらさっぱり分らない。元大神官は熱に浮かされながら「ああ、あたった……まさか……私が」なんて呟いている。何が当たったんだか。何の予想なのかさっぱり分らない。もしかして今代大神官が前代大神官を殺した方法の予想とか？ でもそれだと話が繋がらない。もしこれが合っていたら「まさか私が」に続くのはきつと「まさか私までが暗殺対象になるなんて」だろう。今代大神官は原始的な方法で火を付けそうなくらい手をすり合わせて祈っている。この男がしたとは思えない。

他に考えられるのは神殿外部、つまり王宮のいざこざだ。ついこの間五歳の国王が立って、外祖父筋が傀儡政権にしようとしながら失敗している。王族はたとえ親族の話でも右から左に聞き流して自

分の好き勝手するのを知らなかったのか、それとも一縷の望みをかけたのか。後者かな。後者だろうな。

でも外部がどうして元大神官を狙う必要があるのかが謎だ。たとえ元大神官が王家の中でも特に人の話を聞かなかった……じゃない、武勇に優れた名君　ということになっている。歴史ってこんなものだったのか　の親友　本人は笑顔で否定しそうだ　だとしても、今代の王に意見して聞き入れられるかというところでもない。元大神官はスルースキルを持っているだけであって人形繰り師の資格を持っているわけじゃないんだから。一応建国に携わったことになっている私の話も聞かない王族だぞ、一個人の話を聞くわけがないじゃないか。元大神官が今代の王の外祖父筋から王族を上手く操る方法を乞われて教えなかった、なんてことは起こり得ない。何より元大神官が神殿に帰って来たのはつい昨日の話で、会うことは不可能だった。接触など全くないのだ、恨みようもなければ足に縋り付きようもない。

「ああ、助けてください神様!!」

今代大神官がハラハラとあんまり美しいとは言いがたい顔を涙でぬらす。可哀想だが、私にも分らんものはどうしようもない。ただ元大神官の快復を待っているしかない。

そう言えば私は癒しの塊なのだった。元大神官をここに連れてくればすぐに快復するんじゃないか？　ただそれを誰に言うかだ。

誰に言おう誰に言おう……リヒトで良いか。

「リヒト、リヒトー!!」

私の活動範囲は狭い。せいぜい神殿内くらいしか移動できないが、リヒトを探す位なら全く問題ない。今はきっと他の子供たちと一緒に寮にいるだろう。元大神官が病に倒れたんだ、室内で大人しくしてると言われているはずだ。

「リヒト、キミに決めた」

「え、神様!?　どうしたんですか!?!」

寮のプレイルームらしき大きな部屋でドッジボールをしていたり

ヒトに声をかける。なんというか、元大神官が生き延びようが死のうがお前たちには関係ないだろうが自粛しろと言いたい。近くで苦しんでいる人がいるんだから。

「お前に伝言を頼みたい。今から元大神官の部屋に行き、そこにいるだろ。元大神官の従者ハウルにこう伝えてもらいたい。『今すぐ元大神官を聖霊岩の前に連れてくるように』と」

「元大神官様？」

「うむ。神官に訊けば教えてくれるだろうから、早く行ってくれ」

「わ、分りました！」

リヒトはなんだか嬉しそうにしながら部屋を駆け出て行った。

私がゆうゆうと岩の元に戻っている間に神殿内は騒がしくなり、担架だキャリーだなんだという怒号まで聞こえてきた。そういえばここまで連れてくる方法なんてさっぱり考えていなかったな。今代大神官は眉間にしわを寄せて走ってやってきた神官を捕まえて詰問しだす。そりゃそうだ、蚊帳の外だったから。

「一体どうした！」

「か、神様が元大神官様を聖霊岩の前に連れてくるようにと仰られたそうです！ リヒトがそう仰ったと申しましたのでっ」

「そ、そうか！ 元大神官様は助かるのだな！？」

「たぶんそう、かと」

「そうかそうか。なら良かった 良かった……」

そんなに不安だったのか、大神官。そりゃあ元大神官が死んだ時真っ先に疑われる地位にいるからな。前代はコイツの指示で殺されたんだし。

大神官は長嘆息すると、肩を丸めて頭をがくりと下げた。心労で禿げそうな勢いだったから当然かもしれない。そして、何かに気付いたのか「ん」と声を上げた。

「おい、お供えの果物はいつ変えたんだ？」

「はい？ 私は存じませんが」

元大神官が持つて行った。嬉しそうに。

「そうか……。ああ、実は今回のお供えものの中には完熟したモノを食えば中毒症状を起こす果物が混じっているらしくてな。捨てる時は燃やす様に言うつもりだったんだが」

……元大神官が持つて行った。嬉しそうに。

『当たった』というのは、これ、か。神殿から担架で運ばれてくる元大神官を見ながら、私はとても、生ぬるい気持ちになった。これは、ああ、不幸な事故だ。うん。

その11・私、少し優しくなるのこと

元大神官が食中毒でお亡くなりになって早数カ月、私の日常はとも平穏だった。話しかけてくる者なんていないから静かでゆったりとした時間が過ぎている。

「ああ、静かって素晴らしい。元大神官は残念だったけど」

「勝手に殺さないでくれませんかエ……。私はもうピンシャンしております」

「うん、君が不死鳥のように蘇ってくれたおかげで私の前は大盛況だよ」

（元）大神官の奇跡的な快復のおかげで、聖霊岩の前に行けば病気が治るなんて話が広まってしまった。間違いじゃないんだが、こつも連日押し掛けられるとても迷惑だ。主に私の精神安定上に於いて。今日は私が休館日だとこの男に煩く主張したおかげで静かだが、昨日までの私は何かしらの病に悩んでいるらしい貴族の行列の目的地と化していた。

「良いではないですか、神様なのでしょう？ 民の平穏を配り歩くのは望みどおりでしょうに」

「神だと自称した覚えは全くないのだけどね。ついでに私を神だと言いだしたのはあの大神官だよ」

何故か茶飲み友達 私は飲めないからただひたすら元大神官が飲んでる姿を見るだけなんだが となつた元大神官の視線を無視してあらぬ方向を見つめる。なんと言えば良いのだろう……。リヒト以外に話し相手が出来たことを喜ぶべきなのかもしれない。でもこんな腹の中にどす黒いものを持った老人と楽しい会話をしたいとは全く望んでいなかったのだけれど。

「神殿の権威を上げたかつたのでしょうかね。聖霊様と呼ぶより神様と呼ぶ方が偉そうですから」

「中身は一ミリたりとも変わってないんだけどなあ」

お情けというか、『一応』私の前に置かれているカップには冷え切った紅茶もどきが静かな水面を見せている。クッキーは元大神官が減らすばかりで私の口には一枚も入ってない。

「人間は形や名前を大事にするんですよ」

「そうだね」

良いじゃないか、名前がフーミンでもゼロシヤブでも。名前なんてただの記号さ、私の名前何だったかな。

「そう言えば聖霊様のお名前はなんとおっしゃるんです？」

「何だったかな……」

呼ばれることなんてないし、名乗ることもなかったし。覚えてる方が難しいと思うんだよ。

「おや。お忘れになられた、ということですか」

元大神官は目を丸くした。そりやそうかも知れない。普通、自分の名前を忘れるなんてこと記憶喪失でもない限りないだろうし。

「うん、この姿になってももうウン百年だからな……呼ばれることがなかったもんだからいつの間にか忘れてしまったよ」

百年くらいならまだ覚えていた　かもしれない。自信がないからどうとも言えないけれど、数十年で自分の名前を忘れるほどじゃない。と思いたい。

「そうですか。……ではセイ様とお呼びしましょうかねエ」

「話題の飛翔が激しいのは老化かね？　今まで通り聖霊様と呼んでは良いじゃない」

「いえ、聖霊様とわざわざ言うのが面倒で」

「このジジイ……」

元大神官はいけしゃあしゃあとそう言って笑んだ。元大神官の皺だらけの顔に老人らしい愛嬌があると思っていたのは私の一方通行な愛情だったらしい。

「まあ良いよ。聖霊様とでもセイ様とでも、好きに呼べば良いさ」

「そう致しますよ」

外の明るさとは違い微妙に薄暗い廟の中、宙に浮いた私と椅子に

座った元大神官は長年の友人のように話した。まあ私からすれば元大神官は六十年以上見守ってきた相手であり、元大神官からすれば私は三十年ほど見つめてきた相手だ。会話などその数十年の間に一言たりともなかったが。

よくよく考えてみれば私も元大神官も互いの名前を知らない。私は名前を忘れたし元大神官は名乗ってない。だがそれで良いように思える。知らなくても問題ない。

「そう言えば。元大神官が食中毒で倒れた時に大神官が手の皮をすり減らす様にして祈っていたな」

残り少ない髪の方が更に切なくなるんじゃないかと思うくらい熱心に祈っていた。傍目に見て物凄く哀れだった。前代に大神官の地位を横から掻つ攫われたことを恨んで月夜ばかりと思うなよアタックをしかけたあの男だが、考え直してみれば欲望に忠実で分りやすいことこの上ないと言えなくもない。実はあの男はあの男で神経性胃炎を持病に持ってて頻繁に赤い液体吐いてることも知ってるし、ストレスのせいで肥満気味なのも知っている。ちょっと闇討ちしたことを除けば可愛げのある奴なのだ。まあアレを可愛がろうと言う気は起きないが。

「まあ、巢立つたとはいえ師弟でしたし、今私に死なれると一番困るのが彼ですからねエ」

元大神官は首を傾げながらそう言いだした。

「王宮も一部の者達が好き勝手しているせいで乱れていますし、国王陛下もまだ幼くそれを纏められるだけの力がありません。外祖父である右大臣が必死に王位を守ろうと奔走していますがいつまで体力がもつやら」

私の中での外祖父ってのは藤原家の傀儡政権だったんだが、ここでは微妙に違うようだ。　と言うより前提が異なっている。王位が盤石じゃないものだから、外祖父として権威を振うことが難しいのだ。先代が側室を五人も十人も取ったせいで熾烈な政争が起きており、隙を狙う王位継承権保持者達（と言うよりその母親たち）が

虎視眈々と王位篡奪をもくろんでいるという。滅多な政策を打ち出してみる、すぐに国王の外祖父として得た地位を失くすというバツドエンドが口を開いて待っている。それも、今代は側室の子供なのだとか……知らなかった。正室にも息子がいるらしいんだけどその息子はまだ四歳、三年前に王位についた今代国王は今八歳。巻き返したい正室、このまま地位を守りたい側室　国王に冠被せるのは大神官の役目で、大神官はあっちからチクチク、こっちからもチクチクという針の筵にいるのだとか。ストレスで生え際が後退するくらいならさつさと引退するという手もあるのだが、自分でその地位を強奪したものだから引くに引けないという悲しい状況。ついでに言えば次の大神官になれるような器もない。

「自業自得か」

「ですねエ」

前代ならどうにか出来たかもしれん。少なくとも現大神官よりは人徳に溢れた人だったから。彼なら心優しく野望を持たない人たちの手助けを得られただろうし、お貴族様たちを黙らせるのも楽だったのじゃないかね。今代は　その腹の中に抱える物が灰色なくせに見え見えすぎる。今代よりもこの隣で茶を啜っている男の方が腹黒でいやらしい絡め手を使うと言うのに、今代は可哀想なくらい悪徳神官に見えるというのだから哀れとしか言いようがない。性根が正直なんだろう、生来の気質はそう変えられるものじゃないからなあ。それがどうしてあんなったのやら……環境か？

「助けてやってくれと言わないのか」

あれでもこの男の弟子の一人ではある。先代の方が才能に溢れ性格も良かったことは確かだけれど、二番弟子と言っても良い相手のはずなのだ。

「私の手から離れた大人をどうしてこちらからわざわざ助けてやる必要があるのです？　もう部下でもないのに、そう甘えられましてもねエ」

「なるほど」

冷たいと言うと聞こえは悪いが、割り切っているんだろう。大変ならば助けを求めれば良い。必要なら頭を下げると言うことか。

「ああ、君。お茶のお代わりをお願いしても良いかな？」

急須を傾けても一滴しか出ず、元大神官は子供と一緒に遊んでいた下級神官に手を振って命じた。可哀想に、真つ青な顔して走って行ったじゃないか。

「可哀想なこととしてやるなよ」

「暇そうでしたからねエ。立っているものは親でも使えと言いますし」

優しそうな顔してその実こんな性格なんだから、今代の大神官は哀れとしか言いようがない。男色も幼児性愛も神殿では良くあることだ。少しばかり奴を毛嫌いしすぎたかも知れないな。

「ちよつとあれのところに顕現してあげようかね」

「おや、どう言った心境の変化ですか？」

「いや……あれはあれで苦労していると考えると不憫に思えて」

変態なんてこの神殿には腐るほどいるじゃないか。無邪気な子供に性的な悪戯を仕掛ける奴なんて両手じゃ足りない。魔力保持

者の教育を名目にして男児女児を集めてみたらロリコンシヨタコンに目覚める者が続出したとか、今さつき子供と遊んでいた下級神官も実はロリコンで顔つきがあらぬ世界へ逝っていたとかどうでも良いじゃないか。ちよつと同性愛者かつシヨタコンで腹に一物隠しきれないうっかり八兵衛なだけのあいっただけをどうして嫌えよう。

「私が降臨したとか言えば箔が付くだろうしね」

「セイ様はお優しいですねエ」

「いや、そう優しくもないよ」

「いや、優しいですよ」

ちよつと視野が広くなっただけなんだが。

「おおお、お茶をお持ちしましたアー！」

ロリコ じゃなかった、下級神官がよほど慌てたんだろう、真つ赤な顔をして駆けてきた。凄いことにお湯が零れてない。自慢に

ならないだろうけどお茶くみのプロになれるな……。

「ああ、有難う」

「いえいえいえいえ！」

ブルンバルンと首を振る下級神官を余所目にその場を離れる。さ

て 大神官の部屋ってどこだったっけ。

その12・私、心配すること

すっかり大神官　　と言うとドジっ子のように思えるが、その実態は底が浅いうえそれがバレバレな大神官　　の前に顔を出してやれば、奴は摩擦熱で着火できるのではないかと思うほど手を擦り合わせ滂沱と涙を流した。純粹な子供が見たら泣き出すこと確実な顔に脂肪の腹、年齢かストレスか薄い髪。涙だけじゃなくて鼻水も出ていて汚いのなんの……。元大神官でさえ触れられない私に大神官が触れられるわけがないとは頭では分かっているものの、近寄られることも近寄ることも拒否したくなる様子だった。

土下座最中を飛ばすことも厭わない様子の子の大神官に内心顔が引きつる。そんなに嬉しかったのか、それとも切羽詰っていたのか。そんな彼が抱いているであろう私への夢を壊すのはあまりに可哀想で、私は真面目に威張り腐って声をかけた。

「人の子よ」

しかし早速泣きなくなってきた。なんかこういう言い方は厨二臭い　　というか、念話的な何かで口を開くことなく　　勇者よ。悪を滅し、この世界に再び光を灯すのです　　みたいなことを言うRPGの女神っぽくて嫌だ。こんな羞恥プレイ誰が考えたんだ。　　私か。

「はい、はいい！」

「お前の元大神官を思った祈り、しっかりと私に届いた。これからも精進し励めよ」

コイツが両手の指紋を消す勢いで私に祈っていたのを、年単位で放置したということを気にしてはいけない。

「ありがたき幸せにございます！」

「うん、ではな」

元大神官に訊けば私は光の塊に見えるそうで、姿かたちだけじゃなく名前さえ忘れた私の外側を形成するアイデンティティというのは現在存在しない。　　そのうち本当にRPGの女神様になりそ

うで怖い。だから元大神官にはせいぜい私のアイデンティティ保持のため話し相手になってもらおうではないか。どうせ暇なのだ。大神官の前からフェードアウトしながら、私はそんなことを考えていた。それよりも切羽詰まった問題があることを忘れて。

神様神様と私の前に群がる貴族やなんやに気が遠くなる。人の噂も七十五日と言っじゃないか、そのうち飽きるだろうと自分で自分を慰めながらも、人口密度の高さのため息を吐く。

「神様、なかなか昇進できないんです」

こんなところに来るくらいなら仕事しろ。そういう勤務態度だから昇進がますます遠くなるんだ。

「神様、あの子が振り向いてくれないどころか蔑んだ目で見てきます」

あからさまに嫌われているとなぜ思わないのか。もしくはその相手がサドなのか。本人を知っているわけがない私にどうしろというんだ。

「神様、最近ある人を見ると心臓がドキドキいんです。新種の病気でしょうか」

その病は私にはどうにもできん。さつさと病院に行って医者苦笑いをもらって恋。

「神様、目の前を蚊が飛んでいるのに捕まえられないんです。それに時々視界の端でまぶしい光が差し込んでくるんです」

そりゃ飛蚊症じゃないか。網膜が完全に剥離する前にここへ来て良かったな。

「神様、私、虫歯になりやすいんです」

歯を磨け。甘いものを控えろ。それしか言いようがない。

私に訊いてどうするんだと言いたくなるものから私がどうにかできる悩みまで、聖霊岩の上に寝転んでぐうたら過ごしている私に対し口々に言っている。半分以上は聞き流しているが、残りの半分には突っ込みを入れて遊んでいる。

しかしそんな中、深夜にゴソゴソとやってきた男がいた。人の前では言いにくい願いなのかもしれないと横目に眺め、すぐに興味を失った。男は美青年だったのだ。

美青年という存在に対する印象はただ「最悪」としか言いようがない。妹の周囲に糞蠅が何かのように集り、強引なやり方で自分に振り向かせようとし、私を邪魔だと罵るくせに妹の前では借りてきた猫。顔も性格もしつかりしている男だって少なからず見てきたが、たいがいの顔面に自信のある男どもは我こそが妹に相応しいと言わんばかりだった。

まあ、妹は確かに美少女だった。街を歩けば必ず芸能関係者に呼び止められ、クラス内では妹の前後左右に誰が座るか男子で争奪戦が起きるのは毎度のこと。少々お転婆な面があるがそこがチャームポイントとなつてかわいらしさを倍增させていた。

だいたい似たようなパーツを持っているはずの私は十人並みなのに妹は清楚で可憐な美少女ともなれば私が妹を羨んでも仕方ないことなのだが、私は毎日のように平凡な顔で良かったと思ったものだ。なぜなら、私が美醜について深く考えるようになる以前から妹には複数のストーリーカーが付いていたのだ。

置き勉したら盗まれる、体育の時間にスカートをなくなっている道を歩けば露出狂が飛び出てくる、自宅のすぐ前で誘拐されそうになる。毎日顔色を真っ白にして逃げ帰ってくる妹の姿を見て、きれいな顔も大変なんだとしみじみ思わされた。

幼いころからトラウマになりそうな体験を毎日していた妹は人を見る目を育てたようで、うるさく飛び回る糞蠅共になびくことなく一度もなかった。その鬱憤を晴らすためか蠅共はよく私に突っかってきたが。

というわけで私の中では美形Ⅱばけナスという方程式が成り立っており、美形なんて死に絶えれば良いのにと真剣に思っている。上品な顔と美しい顔というのは、であってⅡではない。ちらりと見るに当該青年は美しい顔なのであって上品な顔ではなかった。

「あいつさえ生まれなければ私の甥が王であつたものを……ふふ、呪われるが良い、クルトめ！」

クルトンってスूपに入れるカリカリしたパンに似た何かじゃなかったか。そんなことを考えつつ青年のすることを観察していれば、青年は私の後ろに回って片膝を突いた。そしてノミと木槌を使いガリガリと私　聖霊岩を削りだした。何をしたいんだ。そして青年は小指の先くらいのかけらを三つ四つ削り取ると、それをハンカチに包んで再び夜闇に紛れた。いったい何だったんだか。

使用目的不明なまま持ち出された岩の欠片だが、どれだけ離れても私の一部は私の一部でしかない。壁に耳あり障子にメアリーとは私のことだ。私の一部はそのまま連れ去られており、どこぞに捨てるでもなく青年の懷中で温められている。信長公の草履みたいな気分だ。

二十分ほど歩いたか、青年は扉をノックして「イマヌエルです」と言うや、返事を待たず扉を開いた。インマヌエルって「神は我らと共に」って意味じゃなかったっけ？　聖歌で Emmanuel, Emmanuel God here with us って歌った覚えがあるんだけど。なんともかんと、たいそうな名前をもらったのね。というか、ここの世界の宗教は一体どうなっているのかさっぱり分かん。

「おじうえー！」

「ルドルフ」

青年を待つていたのは子供の声で、四歳か五歳かそこらだろうか。斜め下から届く声は高い。

「おじうえ、いしはどこですか、ぼくにもみせてください」

「ああ。だが先ずは座ろうか」

青年は私を取り出しながら少年を連れて歩き、どっかりと座った。ルドルフ君とやらが隣の椅子によじ登る音がしたのち私（の一部）が御開帳。　ルドルフ君はまだ幼いだろくに性格のキツそうな目つきに薄い唇、くるくる天パの美少年で、将来は糞蠅と同類になり

そんな顔をしていると思ったとたん興味が失せた。

室内は小学校の教室二つ分くらいあり、精緻な天井画まで描かれた豪華な部屋だった。ビロードのカーテンがかけられたステンドグラスにはどこか見覚えがあるような気がしてならない顔の女性が微笑んでいる。女性の背景には鬱蒼と茂る森に青く巨大な岩　あれ、これにもなんだか見覚えがあるぞ？

「とてもきれいですね」

「そうだな。聖霊岩は王家の守護岩　これを媒介に呪えば、クルトめもすぐに死ぬ」

「クルトがしねばくがおうさまになれるんですよ」

「その通りだ」

話について行けん。私を媒介に王家を呪うとはどういうことなのかさっぱり分らない。王家の守護なんて岩になってから一度もした覚えがないんだが……。あの話を聞かない奴等は思いこみと勘違いで行動するからな、私が守護していると思い込んでいるのかもしれない。とてつもなく迷惑。

「ああ、ルドルフ。きっと私がお前を国王にしてみせるからな」

「はい、おじうえ」

ここまでの情報をまとめてみようか。ルドルフ君は王族だろう。この年齢、かつこの時間に王宮内にいるとなれば王族くらいしかない。そして見たところ年齢は四つかそこら。年齢の割に大人びている言動で、クルトという名前の餓鬼　スープに浮かべるアレじゃなかったのか　が死ねば、次の王になる地位である、と。もしかしてこの餓鬼、正妻の息子なのか？　それ以外に思い付かないんだけど。

「おじうえ、どのようにしてあのクルトをのろうのですか？」

「教えていなかったか。よし、せっかくだからお前もこの機会に知った方が良さだろう」

ルドルフ君が私をつまみ上げた。視界が少し高くなる。

「建国から続く各家にはそれぞれの守護石があることは知っている

な？」

「はい」

へー。

「我がアルブレヒツベルガー家にはダイヤモンド、テーアイ家にはルビー、ディングフェルダー家にはアメジストのように、それぞれ決まっている。アルブレヒツベルガーの者がルビーを持つことは許されていないし、テーアイの者がアメジストを持つことも許されていない。何故だか分るか？」

「いいえ、おじうえ」

アルブレヒト救助船、茶漉し、正しいフィールド。一体どういう基準で名字を付けたのか分らない。こちらの言葉が自動翻訳される私の耳にはそれぞれのご家庭の名字が愉快な変換で届く。

「違う家の守護石を持つということは、相手の家を呪うということだからだ。他家の者がダイヤモンドを所有していた場合、それはその家が我がアルブレヒツベルガーを呪っていたということに他ならない」

「どういうことですか？」

「石の守護の力を歪めているからだ。つまり、真っ直ぐ届くはずの守護の力が他家の守護の力に影響されることにより歪み、力が変質するのだ」

つまり青年が言いたいのはこのことだ。冷たい川の水が、^{ぬるめ}し水路を経由したらぬるくなった。冷たい川の水だからこそ冷却効果があるのに、ぬるくなつてはその効果がない。そういうことだろう。にしても何で私は農業で例えているのだろうか謎だ。

「これは私が家に持ち帰り、隠しておく。分ったか？」

「はい、おじうえ」

ルドルフ君は良い子の返事だが、さつきクルトを呪い殺せば云々と言っていた。不穏だ。大人になった時対人関係で悩むんじゃないかってお姉さんは心配だよ。

その12・私、心配すること（後書き）

お久しぶりですみません。USB行方不明事件はいまだ解決せず、そのまま迷宮入りするのではと思っています。I子（USBの名前）の文字が掠れてきてI子ではなくT子になっていますが、そういえばくら寿司（USBの名前）もオリゼーに改名したことを思い出し、時間とはそういうもののだとしみじみ感じています。ついでに、全部で三つあるUSBですが、残りの一つの名前は「鶏」です。

驚見に命名のセンスが皆無ということは分って頂けましたでしょうか？ これからも生ぬるい目で見守って頂ければ幸いです。

その13・私、デバカメすること

イマヌエルなる男が私の一部を誘拐して三日ほど過ぎたか。王宮内ではとある噂がまことしやかに流れていた。曰く、聖霊岩の一部が欠けている、と。

昨日その言葉を確かめるべく神官たちが総動員され、下から上から私を確認した。ベタベタ触られることの不快感に鳥肌を立てている私と呆れ顔の元大神官、汗びっしりの大神官が見守る中、のみの跡が見つけられた。でっぱりに隠れた場所のため一目では分からないが、探せば見つかる位置だ。トップとして私、岩を守るべき立場にいる大神官は、神官二人に引きずられて寝室に連れて行かれた。大神官として責任を取らなければならぬ彼には可哀想なことだ……せつかちにならずに十年待てば自然とその座が転がり込んできたものを。死んでお詫び、なんてことになるかもしれない大失態だからなあ、うん。

「これはゆゆしき事態ですぞ、陛下！」

茶漉し伯爵なる男はつばを飛ばす勢いで怒鳴り散らしている。誰だかが国家転覆を狙っているのだ、これは王家を呪おうとする者による陰謀である云々と高説を垂れ、周囲も興奮のあまりかそれに追従している。どうやらこの国では「石を媒体にした呪い」というのは本当に恐れられているようだ。周囲の貴族連中の顔色は悪い。

会場には二百を軽く超える人間がいて、馬蹄型のテーブルの向こう端、つまり末席に座る人の顔はさっぱり見えない。右と左にそれぞれ百人以上いるのだから当然かもしれないけど、これでどうやって会議に参加しろというのだろうか。それとも末席の彼らはただ参加しているだけなのか。

「その通りだ。わが王家の守りたる聖霊岩をけずるとは、命知らずもはなはだしいことだ」

八歳児であるはずの今上陛下は真面目くさった表情で頷いた。こ

の年齢だともつと子供らしくても良いはずだが、やはり背負うものが違うと保護者も心構えが違うのだろうか、顔つきだけでいえば十二かそこらと言っても良いだろう。

「麗しき聖霊様の御身にのみを当てるとは全く」

「陛下、聖霊様ではなく神様です」

「ああ、そうだったか。うるわしき女神の柔肌に傷をつけるとは信じられぬ」

「陛下、女神ではなく神様です。そして柔肌ではなく岩肌かと」

「彼女を傷物にした罪は深い」

「陛下……」

この餓鬼は本当に八つなのだろうか。

「茶漉し、貴様は女神を傷物にした無礼者を見つけ、余の前に引きずり出せ。余自らそ奴を鞭打ってくれよう」

「ははっ！」

茶漉し伯爵は胸に手を当て頭を下げた。なんととはなしに会場を見回せば、間に一人挟んだ手前側にイマヌエルが真っ青な顔をして座り、そのまた三人挟んだ隣が今上陛下の外祖父筋である……えっと、誰だっけ？ が座っている。なんだ、イマヌエルって奴、偉かったんだな。王様に近ければ近いほど偉いから、左に王の外祖父、右にその息子つまり王の叔父、左の二番目にもう一人の叔父 と、左右左右の順に偉い人が座っている。外祖父の筋が偉くなるのは当然だから考慮に入れないとして、イマヌエルがトップ五位以内の家柄だと分かった。

にしても、イマヌエルの顔は血の気が引いて真っ青だ。ここまでの大ごとになるとは思わなかったのかね？ 削った跡さえ見つからなければ問題にならなかったのだから安心していたのかもしれない。「お静かに！ では次に、大神官の処罰をどうするかです」

ざわざわと波打つように騒がしい会場内を鎮めようと、さっき国王に私の呼び方を何度も訂正した男が声を張り上げた。彼はこの会議が始まった時もこうやって指示を飛ばしていたし、進行役なのだ

ろう。

「うるわしの女神を守りきれなかった奴の罪は重い……殺してしまえ」

なんて物騒な餓鬼！　このまま成長したら傍若無人な独裁者になるんじゃないかなろうか……周囲の人も可哀想に。

「陛下、大神官の仕事は聖霊岩を守ることだけではございません。殺してしまうというのは少々短絡的かと存じます」

外祖父方の誰とかが眉尻を下げた。その通り、大神官の仕事は私の管理だけではない。神殿の名前で集めた餓鬼共の育成、神殿行事の運営、大神官という役職のみに任された毎朝の礼拝とか。持てる権力も大きくなるが、机の上に積み上げられる書類もその分だけ高くなる。良い事づくめなんかじゃないのだ。

「ならばこの落ち度をどうつぐなわせる？」

「罰金もしくは礼拝時以外の外出禁止　謹慎半年、でしょうか」

神官には基本的に自宅がない。職場に謹慎半年はかなり辛いと思う。

貴族社会において後継^{エア}ぎとそのスペアである長男次男以下、つまり三男四男はいても無駄な存在でしかない。才能があれば臣下に養子に行かせたりすることがあるけれど、たいがいは縁を切られるのだ。しかしだからと言って子どもを街に放り出すわけにもいかないし、放り出されたとしてもぬくぬくと育てられたお貴族の坊ちゃんが生きていける保障は全くない。そしてここで登場するのが神殿なのだ。

神殿は職員が欲しい。貴族は一応血を分けた子供をのたれ死にさせたくない。双方の希望を叶えた結果、貴族の坊ちゃんたちは神官見習いとして神殿に入るのだ。神殿に入るときに元の家との縁は切られ、手紙のやり取りも禁じられる。まだ父子の間なら希薄な繋がりでも情が湧くかもしれないけど、世代交代なんてしたらもう他人同腹の兄弟じゃないかと泣いてすがっても蹴られて終わりどころか、不敬罪で斬首もありえる。

「半年は短すぎないか。一年はどうだ」

「でも一年は長すぎでは」

「一年もの間大神官の仕事が滞るのは問題では……」

会議の席の前方二十人ほどがざわざわと話し合う。一年も部屋に引きこもるなんて、二ートやヒッキーでもない限り我慢できないだろう。ゲームや娯楽があるわけでもなし、運動もできないとなったら今以上に太るんじゃないだろうか？

「では罰金と謹慎半年にしては？」

「それが良いか」

「では」

「そうだな」

罰金と謹慎半年で決まった。といってもそれは貴族たちの意見であって、最終決定権を持つ八歳児の許可は下りていない。皆が王座を窺う。

「謹慎一年だ」

「いえ、ですがそれでは大神官が出る必要のある行事に支障が出ます、陛下」

「代わりの者を使えば良い」

「しかし」

「豊穰祭の水わけ式はどうなさるのです」

「新年祭の新風式は」

「今代の大神官が不可能なら、大神官であつた者が代わりを務めれば良いではないか」

「それはもしや」

「なるほど、それならば……」

人の話を聞かないわりに、筋が通った意見だ。そう思っていた。

「大神官への罰は謹慎一年！ それと罰金だ！」

「へ、陛下……それはあまりに酷ではありませんか」

「大神官もまさかこのような事件が起こると思ひもよりまずまい」
「想定外を想定してこそ、リーダーなのだ！」

格好良い！ でも想定できるならそれはもう想定外じゃないと思う。

その後八歳児は意見をこり押しし、可哀想に大神官は一年間の謹慎および財産の半分を取り上げられることになった。

楽しみもない一年間の強制引きこもりに加えて金を巻き上げられることになり……哀れ、大神官。だけど元大神官にまで飛び火したのは運が悪かったとしか言いようがない。こんな時期に帰ってきてしまった不運、食中毒にかかった不運、すぐに出て行かなかった不運。

これから大変になるな、とあくまで傍観者でしかない私はため息を吐く。老骨に鞭打って頑張ってくれたまえ、元大神官よ。あとで王宮から使者が来るだろうけど逃げないように。え？ 何の使者が来るかってそりゃあ

「元大神官に、一年だけ大神官の仕事に復帰するようになっていう命令だよ」

「なんですか、それは」

「大神官の一年間の謹慎と罰金が決まったのさ。謹慎期間中の大神官の職務を肩代わりしなさい、という辞令がそのうち来ると思うよ」

元大神官が嫌そうに顔を歪めた。昔していた仕事だろうに、どうしてそこまで嫌そうなのか……。

「ハウル、ハウル！ いますね！」

「はい、長老様！」

「秘境にあるという幻の桃が食べたくなりました。今すぐ旅に出ます。用意は別にいりませんよ、道々揃えながら行きますからね」

「長老様、突然どうされたんですか？」

「いえ、面倒事が走って抱き着いてきそうな予感がするものでね。ではセイ様御機嫌よう、また何年か後に、生きていたら会いましょう」

元大神官は私に手を上げると、颯爽とした足取りで宮城の出入り口へ競歩した。ハウルとやらがその後を追う。

「無駄な抵抗はよした方が良くと思うのだけどなあ」

どうせ城下町から出る前に捕まるだろうに、よつぽど逃げたいの
だろう、競歩だったのがすぐに駆け足になって遂に走り出した。

私は元大神官のことは放っておくことにして、意識を私の欠片に
向けた。もちろん誘拐された欠片ではない。

私の一部は建国以来、王冠の真ん中に居座っているのだから。

そのお外・設定資料（前書き）

大変な長らくお待たせしている挙句、やっと更新したのは設定資料です。ごめんなさい。

そのお外・設定資料

人物設定

*私

名前はもう覚えていない。元大神官にはセイ様と呼ばれる（聖霊のセイ）。元日本人で十人並みというよりボーイッシュだったそう。可愛すぎる妹のせいで、妹に群がる男（もれなく美形）に対して醒めた感覚を持つ。フツメンと結婚できたら幸せかなと思っていたが、聖霊様として実体をなくした時にその夢は潰えた。長い年月を透明な姿で過して来たため自分の顔さえ既に覚えていない。

*元大神官

聖霊岩の前に一晚果物を置くと凄く美味しくなることから無類の果物好きになった男。幼馴染でもあった国王のKYぶりや横暴ぶりに諦めというスキルを誰よりも伸ばした。聖霊の加護がある（？）果物を長年食べ続けたせいかこの時代では怪物並みの寿命を誇り、大神官代理として復職させられるまでは全国津々浦々美味しい果物を探す旅に出ていた。

*ハウル

元大神官の従者。神官ではなく、武官。頭が少し足りず、皮肉が通じない。この連載で名前がきちんと出た少ない人間の一人。

*リヒト

聖霊（私）の（今のところ）唯一の弟子であり、やはりKY。中二病患者的思考回路も保持している。お礼は言えない。謝罪も言えない。ハウルと同じくモブキャラのくせに名前がある。

*王家の皆さま

KYの集まり。空気読まない、自分勝手な解釈をする、人の話を聞かない。高祖であるエルの素質を濃く受け継いでいるのか『小心者のヘタレ』か『人の話を自分勝手な解釈をし思い込んだら止まらない』の二種類がいる。

*大神官と愉快なしもべたち

太った中年で、あまり良い人相をしていない。ちよつと頭が足りないのではないかと「私」は危惧している。

また、貴族連中の三男以下が引き取られ愉快なしもべたち　じやなかった、神官になるため、一応皆さん名家の出身。しかし性的欲求を解消する相手がいない（女子は神殿に引き取られない）ため、妖しげな方向に逝っている人もいる。ここ数年は子供が魔法の力を持つようになったため制御方法を学ばせるといふ目的で彼らを神殿へ集めている。そのためロリコン・ショタコンに目覚めた物が後を絶たない。

*クルト

スープに浮かべるカリカリしたパンではない。言動がどうみても女たらしにしか思えない八歳児で、聖霊岩に対する執着はかなり強い。そのうち『余は聖霊岩と結婚する！』とか言い出しそうだ。

*イマヌエル・アルブレヒツベルガー

聖霊岩を削っちゃったんだぜ　という猛者。甥っ子であり先王と先王正妃の息子であるルドルフを王位につける為クルトを呪っている。効果は不明。

*ルドルフ

イマヌエルの甥っ子であり、まだ片手で足りる年齢のはずだがか

なり不穏な会話を平気でイマヌエルを交わす。成長したらどんな大人になるのか不安は大きい。

何故かモブにはかり名前がある。以下は今のところ出ている背景設定。

* 守護石

それぞれの家を象徴する宝石の種類のこと。A家の者がB家の守護石を持っていると、A家がB家を呪っているということになる。王家は聖霊岩、アルブレヒツベルガー家はダイヤモンド、テアーイ家はルビー、ディングフェルダー家はアメジスト　　が今のところ出ている。

* 神の恵み^{マナ}

種の可能性を最大限に引き出すことを目的としている、神が適当に振りまいている力。主に『一部の遺伝子情報を壊す』成分と『遺伝子を修正しつつ直す』成分の二つで構成されている。紫外線のよくなもの。

* 聖霊岩

神が『自分が管理すると種の可能性とか進化とかないよね』と考えた結果、神が放出した大気中のマナを吸収する基点として出来た。聖霊岩に宿る人格は適当にどこから引っ張ってきた。ついでに取扱説明書もフォローも説明もなかった。

* 呪文

「私」が適当に考えたため厨二的。ついでに日本語。もしこのあ

と日本人が（肉体を伴って）トリップしてきたらとても都合主義なヒロイックサーガが物語られる。

* 魔物

大気中のマナ濃度が上がったため魔改造気味に進化してしまった動植物のこと。そのうち人間並みの自我を持つ存在が生まれてもおかしくない。

その14・私、電波を受信拒否すること（前書き）

今回は短いです

その14・私、電波を受信拒否すること

可哀想だが元大神官は連れ戻された。泣く子には勝てぬと言うが泣く大人もシニールな光景だと思う。目の周りを真つ赤に腫らせた屈強な神官三人に連れられ返ってきた元大神官の顔は、彼の幼馴染でもあつた王が現役だつた時に頻繁に浮かべていた表情を浮かべている。せつかく色んな物から解放されて自由になつたのだらうに……今だけ憐れんであげたいと思う。

神殿行事と言うものは季節ごとに必ず一回あり、一月の神風式きよづちに四月の清土きよつちの祓い、七月の水分け式、十月の拭魂ふっこんの祓いがある。神風式は大神官が巨大な扇を優雅に煽いで『年度が新しくなりました。新年度ですよ』という儀式で、また『式』と付く七月の水分け式も豊穰祭を形式的に行つただけのものだ。神殿にとつて大事なものは清土の祓いと拭魂の祓いで、清土の祓いは土の穢れを祓い作物の実りを良くし、という題目だが役に立つてはいない、拭魂の祓いはその一年の間に死んだ者の魂を慰め昇天させる、ことはもちろん出来ていない。おかしいな、どの行事も結果的には何の意味もないじゃないか。

ところで、七月に豊穰祭っておかしいよなと私も初めは思った。普通九月か十月だろう、何故七月にするのか、と。だがここは暦の数え方が違ふのだ。西暦とは一年の始まりが違い、雪が溶けて春になつたら新年、つまり、西暦で言う三月あたりが一年の始まりなのだ。旧暦と似たようなものだと考えれば間違いない。だいたい、元々西暦も三月始まりだつたのをいつだかのお偉いさんが二カ月前倒しして一月始まりにしたんだから。

今回の事件を調査するため可哀想な元大神官、じゃなかった、大神官代理が先頭に立ち、一体噂の元はどこなのか聞き取りを始めた。私はイマヌエル君周辺の女中さんから露呈したんだろうと思つていたからさほど調査に興味はなく、心の中で応援していた。何故か大

神官代理は被害者本人である私に聞こうとすることもなかったし。

毎日大神官代理は私の元を訪れては去っていく　ただ、果物を取りに。見るからに暇そうに浮かんでいる私を羨ましそうなジト目で見てくる以外の被害は特にない。そしてリヒトは大神官に特に目を掛けられていたはずだが彼に会いに行くこともなく手紙も出さず、恩知らずとはこいつのことを言うのだ。私は初めの選択を間違えたのだ、もっと控えめでお礼や謝罪を言える子を選べば良かった心の底から思っている。しかし、今まで関わってきたこの世界の住人のほとんどが一癖二癖ある変人ばかりだから『どこでも一緒』ならぬ『どいつを選んでも一緒』なのかもしれない。あれ、『いつでも一緒』だったか。

調査を始めて三日が過ぎ五日が過ぎ、噂の出所が分った。自称天才占い師の女中だとかで、口癖は『見えます、ああ、真実が見えます！　真実はいつも一つ！』だそうだ。おかしいな、この世界には変人しかいないらしい。どこの体は子供、頭脳は大人の名探偵だ。彼女は神殿と宮中を往復して手紙やら物品やらを運ぶ係りだそうで大勢の中で働かせると他の女中を怪しげな宗教に入信させて信者を増やすかなり凄い人なのとか。それだけ口が上手いなら外交関係の職に就かせたらその才能を良い方向に発揮するのではなかるうか。私個人としてはお付き合いしたくないタイプだが。

「えーっと、君は　」

「お待ちください！　貴方が何を言いたいのか、私にはよく分ります。私の名前を知りたい……そうですね？」

「うん、そうですね。で、名前は？」

「俗世と関わり合いになることを我が神はお許しになりません……ああ、ですが、俗世では名前なる呼称が必要なのです、ああ、女神さまっ！　この愚鈍な貴女の僕クララに呼称を名乗る許可を！！」

「クララさんですね、分りました。で、聞きたいのは　」

「お待ちください！」

「……うん」

「貴方が何を聞きたいのか、私にはよく分ります」

「そうですか」

こっそり覗きに行ったら凄いことになっていた。どうしてこんな人が女中として城で働いていたのか分らない。

「聖霊の宿る岩が削られたことを何故知っているか。聞きたいのはそれでしょう」

「そうですねエ」

「無知蒙昧なる俗物には分りますまい、これは全て我が神の御技！愚鈍な僕であるこの私めにも我が神はお優しくいらっしゃるのです！」

「うん」

話が進まないな、これ。じっと見てみれば彼女には神の恵みを精製する機関があった。マナの流れは脳にまっすぐ伸び、どうやら天才占い師というのただの騙りではないようだ。占いしかできない、一点集中タイプか。

話を聞いている大神官代理も泣きそうだ。傍に控えている神官たちも怪物を見るような目で彼女を見ているし、なんともかんといい難い。

「我が神はこう仰いました。『我が忠実な僕たるクララよ、お前はこれから私が見せることを人に広めなければならぬ』と。そして私は闇の化身たる悪魔がこの世を混乱させんがため王家の守護岩である聖霊岩を削り、懐へ隠して去っていく姿を見たのです」

名前は俗っぽいものじゃなかったのか……何故呼んでいるんだろうか。

「ふむ、では、君は神様からそれを教えられたと言うのですね？」

「その通りです！　ですから私は我が神のお言葉に従い、人にこのことを話しました」

私の姿に気付いていたらしい大神官代理がじっと見つめてくるから、首を横に振って答える。どうせ向こうさんには私が光の玉にしか見えてないのだ。

「私は知らない。彼女はそういう力を生来持っているんだと思う」

突然体を振って空中の一点を睨みだした大神官代理に神官たちも慌てだした。クララ教に侵食されたのではないかと不安に思うのも仕方ない。

「大神官代理、どうされましたか」

「もしやこの女が何かおかしいことでもしましたか？」

「いえ、聖霊様へ確認を取っていただけですので問題ありません。心配は無用ですよ」

「そ、そうですか」

神官たちの顔は不安そうで、そりゃあこんな電波系を相手にしたら誰もがそうなるわなと思った。これから彼女にもっと掘り下げたことを聞いていかなければならない大神官代理を思うと、可哀想さに涙が零れそうだった。出ないけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046o/>

何様、俺様、聖霊様

2011年9月16日13時03分発行